

## 【登場人物】

・パンダヒーロー  
パンダの着ぐるみを纏い、素顔を明かさないとされる暗殺者。本名ジョッシュ・ワイルダー。

・ミミ  
前金としてパンダヒーローに引き渡された少女。長年ロバートに育てられていた。一二歳。

・ロバート・クロス  
悪名高き美貌の豪商。売春や密売で巨額の富を築いた。自身の権力誇示のためパンダヒーローを雇う。三十二歳。

・イーサン・カーター  
ロバートの腹心で優秀な暗殺者。銃の名手で物静かな青年。二十六歳。

・リーズ・ドーキンス  
ミミの元家庭教師。優しく穏やかでミミが唯一心を許せる相手。

・ヴァレリア・ドウヴィーヌ  
高級娼婦。イーサンの公式愛妾。

・ジョン・ヘイスティングス  
ロバートに匹敵するほどの力を付けた商人。ロバートに宣戦布告するがパンダヒーローに殺害される。冷酷な性格で人々からは嫌われていた。

## 【重要用語】

・シヴァ街  
ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。ロバート、イーサンが暮らす。

・ヴィシユヌ街  
三区分の内、真ん中。中間階級の人々の住む街。パンダヒーローとミミが暮らす。

・ブラフマー街  
ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。

・ヴァルナ社  
ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。ロバートが社長を務める。

## 【前回の粗筋】

――一九二七年、アメリカの中で最も治安の悪い街と言われるネオンライトタウン。その街の一番の権力者、悪名高きヴァルナ社のトップとして君臨するロバート・クロスは自身の対抗勢力を削ぐためプロパガンダを画策する。その宣伝法として選ばれたのは、パンダの着ぐるみを纏い、素顔を明かさないとされるパンダヒーローだった。ロバートは彼に前金として自身を引き取り育てていた少女ミミを与え、公衆面前の場で対抗勢力の代表であるヘイスティングスを殺害するよう命じる。

勝手に前金とされたミミは、ロバートやイーサンに激しい嫌悪を抱くが、次第にパンダヒーローと心を通わせていく。決行の日、パンダヒーローは見事にヘイスティングスを葬り、プロパガンダを成功させる。彼はミミの待つ家へと帰り、自分の素顔とジョッシュ・ワイルダーという本名を明かすのだった。

――一方ロバートは計画の成功を部下から聞いていた。「人々はヴァルナの恐怖を再び感じていた」という報告の他に「それでもヘイスティングスを葬ったパンダヒーローに感謝している者もいた」と聞き、ロバートは興味を示す。しかし、成功を喜ぶロバートの傍らで、イーサンはこの計画があまりに上手くいき過ぎたと疑問を抱くのだった。

「だま

どうも強烈な印象というものを最も効果的に与えるのは一度目に限った話らしい。パンダヒーローは着ぐるみの中でそう思わずにはいられなかった。あの一階登るごとに圧倒されるような高さも、今ではただ面倒なだけだし、廊下の端々に鎮座する見事な調度品も、うっかり壊してしまふんじゃないかという感想以外出てこない。

「面倒くさいなあ」

と、彼は前を歩く護衛に聞こえないよう呟いた。

二時間前、彼は丁度「戦勝を祝おう」という内容が記された、例のあの人からの置手紙を受け取ったのだった。今夜はミミが好物のペストリーをどっさり焼いてくれる手筈になっていたので、彼はこの呼び出しに不満なだけだったが、抗議する暇もなく数人の男達に家に押しかけられ、あつという間に車に押し込められてしまったのだ。パンダヒーローはむつりとした顔を着ぐるみの下にして、ヴァルナ社のビルの長い廊下を歩きながらも一度ため息をついた。

戦勝どころはもうどうだっていい。今はただミミと過ごしたいのに。なぜ律儀にロバート・クロスなんかにかいに行くのだろう、俺は……。護衛の一人が突き当りにあった部屋の扉を開けた。例の書齋だ。ミミと初めて会ったあの部屋。

扉と書棚の陰に、細い肩と金髪が見える。やがて華奢な上半身がするりと持ち上がり、肩越しに嬉しそうに微笑する男性の横顔が現れた。

「ああー！」

ロバート・クロスが軽やかに言った。

「よく来てくれた！ さあ、入って掛けたまえ！」

パンダヒーローはそのそと体を動かし、彼の前の肘掛け椅子に移動した。

ロバート・クロスは以前会った時よりも美しく壮健そうだった。髪は研磨された後のように艶やかで、綻んだ上下の唇からは白い歯並びが覗いている。

彼の隣には、以前は背後に控えていたイーサン・カーターが、籐椅子に座ってこちらを見ていた。彼はまた一層静かだった。まるで彼の周りの空気さえ凍り付いたように。

やがてパンダヒーローは、肘掛け椅子に腰かけ、不満げな態度を打ち消して口を開いた。

「今晚は、お二人さん。調子どうだい？」

「すこぶるいいさ、君のおかげでね」

ロバートは六歳ごろの少女がするように、口角に力を入れて頬に窪みを作った。そうすると、漂うような官能が剥がれ落ち、随分と彼は幼く見えた。その幼さが、言わずもがなパンダヒーローを不快にさせた。

「まあ、紙面でも知らせたと思うが、プロパガンダの成功を祝おうということだね。何、ほんの気持ちばかりのもてなししかできないが、寛いでくれ。ブランドーか葉巻は？」

ロバートが小卓の上を指すのにパンダヒーローは片手を軽く振って答えた。

「いや、どっちも大丈夫だ」

「おや、天下のパンダヒーロー様は酒も煙草もお気に召さない？」

「お気に召さないっていうか……」

彼は小声で言った。

「飲めないんだ。俺、まだ十五歳だから」

匂わしい姿勢のまま、ロバートがキョトンと間の抜けた顔をした。イーサンも口を半開きにする。

「十五？」

「ああ」  
「まだ十五歳？」

「ああ」  
ロバートはしばらく、相変わらず間抜けこの上ない顔で睫毛をパチパチと動かした。口の中で何やらブツブツ呟いたと思ったら、急に立ち上がって叫んだ。

「俺より十七も年下!!」

パンダヒーローは驚いて「急になんだよ!!」と口走った。そんな彼に構わず、ロバートは大声を出し続けた。

「十五! 十五だつて!! 十五なんてまだほんのガ……子供じゃないか! ええ、俺は……じゃなくて私はじゃあ、まだこんな子供に一万ドル渡すなんて言ったり、大事な計画のことを話したりしてたつてか!」

「ロバート」

イーサンが静かに彼を諫めた。黒々と濡れた瞳が上を向く。

「落ち着けよ。俺達が稼いでた頃もまだほんの子供だったろ」

「え……ああ……、そうだったな」

ロバートはコホンと咳を一つし、崩れるように椅子に座った。しかし、再び顔を上げた時にはすでに先ほどの美貌を顔に取り戻していた。

「取り乱して済まない。年齢云々はまあ、いいとしよう。逆に若いといい事もあるし……」

「いい事？」

「いや、いいんだ。忘れてくれ」

ロバートが静かに頭部を横に揺らした。その頬が、ほんの少しだけふんわりと赤く寛いでいた。彼は卓上の、電球の光を受けてキラキラ光っているブランドーグラスを取ると、白い喉を仰げ反らせて中身を流し込んだ。そ

の時の、顎の線が細く優美なのに、パンダヒーローはどこかほっとした。

「まあ、さっきの話は忘れよう。私は君ともう少し打ち解けた話があったい」

「内輪話ねえ」

「議論を繰り広げたっていいぞ。その英語の発音を聞く限り、君は中々の知識人らしいからな。どうだ、私の話を聞きたいか? 金とアッチの話なら、インテリゲンチヤ様にも劣らないと思うがね」

ロバートは下卑た笑い声を立てた。パンダヒーローは途端に彼への嫌悪がむらむらと湧き上がってくるのを感じた。しかし、それはロバートの愛らしい笑窪に対する不快感よりも熱いものだった。

「なんでそんな風に笑つてられるんだ？」

低い声で彼は問いかけた。

「は？」

「お前の命令で人が死んだ。一人の女の子が金にされた。それを分かってるのか？」

ロバートは口の端を斜めに歪めて涼し気に笑った。

「人が死んだ? 女の子が金にされた? まあ、戯けたことを。ヘイステインクスを殺したのは君じゃないか」

「命令したのはお前だ!」

「ああ、そういえばそうか」

ロバートは相変わらず細くすつきりとした顎の先を上に向けた。

「君は私の依頼を受けてそれを実行した。それだけだ。」

君が悪いわけではない。行動したのは私だ。君は何も考えず、疑問に思わず、私に従った道具であるだけだ」

「お前……!」

パンダヒーローは嫌悪が怒りに変わるのを感じた。そ

の時、彼の頭を占めていたのは、ミミの優しい笑顔だった。

「ああ、確かにそうかもしれない。それにヘイステイングスのこととやかく言うのはやめよう。あの男は死んでも当然のクズだつて話だったからな。だがな、ロバート・クロス。じゃあ、ミミはどうなる。あの孤独な彼女は、俺と同じ考えなしの道具なのか？」

「なぜ一々そんなこと考える？」

パンダヒーローの若い怒りの声に、気だるげなロバートの声が重なった。

「金は金なんだから、黙って受け取ればいい」

「金だつて!! 畜生、ロバート・クロス。よく聞けよ。」

彼女は確かに前金として俺が受け取ったが、今ではもう俺の大事な同居人だ。二度とミミを金だなんて呼ぶんじゃない!」

「ああ、面倒くさいな。そもそも君は殺し屋だろ? 人の命で食べてる君が、私をどうこう言う資格があるのかね？」

「ああ、あるさ」

パンダヒーローは着ぐるみ越しに彼を睨みつけると、絞り出すように言った。

「確かにお前の言う通り俺は殺し屋さ。人の命を奪い、お前みたいな人間から金を貰う。だけどな、俺は決して罪のない人の命を奪ったりはしない。もしお前がそこら辺で遊んでる子供を殺せと命じたら、俺はすぐにでも断るさ。ヘイステイングスの依頼を引き受けたのは、アイツが心底からのクズだったからだ。そうさ、お前は俺を何も考えない道具だと言ったがそれは違う! 俺だつて考えるし、善悪の区別だつてお前よりは付いているはずさ! 周りの人間がみんな踏み台にしか見えないお前と

は違うんだよ！」

「バカらしい！」

ロバートは、彼の激しい言葉を、唇の隙間から吐いた鋭い声で一蹴した。

「この前はへらへら私の言う事を聞いて、ヘイステイングスがどういいう人間か聞きもしなかったのにな。この数日で随分な口の利き方を身に着けたもんだ。ああ、そうさ。君は自分に都合のいい言い訳を探してるだけなんだ。何が善悪の区別だ。人の事を尋ねもせず、見もせず、分かるうともしくなくせに。君はミミによく見られたいからそんな風に言うんだろ？ それもこれも、あの甘ったれた小娘に惚れたせいだね！」

「バカにするのも大概にしやがれ！」

パンダヒーローは激昂のままに立ち上がった。荒く息を吐いたが、鼻先にある着ぐるみの内壁に跳ね返されて、顔中に熱が籠った。

「最初に会った時はなるべく意識しないようにしていたが、もう限界だ。ロバート・クロス。あなたは噂通りのろくでなしだよ。あんたこそ、人を見てなんかいないじやないか。頭にあるのは自分のことばかり。人間は物扱い。俺はいつも罪なき人々には親切にして、何でも分け与えるようにしているが、あんたは違う。汚い金を貧しい人々に分け与えて少しでも綺麗にしようともしない。そのブランデー一杯に三か月分の給料を費やしたって、舌先一滴しか味わえないヤツだっているんだぞ！ 俺はそういう人を忘れたりしない！ 俺に出来るのは、あんたみたいに汚い奴らを殺して金を貰うことだけだが、そんな行いもせめてマシにしようとな努力してるんだ！ だが、お前はそういう努力もせず、高い塔から苦しんで喘ぐ人々を見下ろしてるんだ！」

彼の激しい言葉に、ロバートは涼しい顔でグラスの縁を舌で舐めた。

「最初に会った頃と比べて随分感情的になったじやないか。全くあの小娘。よくも私の仕事を面倒にしてくれたもんだ」

「いい加減にしろよ！」

パンダヒーローは小卓を拳で打った。グラスの中の液体が浮かび上がり、木目に雫の跡を描いた。

「もう一度言うぜ、ロバート・クロス。あんたはろくでなしさ。何から何まで腐りきってやがる。救いようがない。きつとまともな人生なんか歩んじやいなさ。同じようにろくでもない親から生まれて、自分のためだけに生きて！ 純潔だってもうないんだろ？ 男相手だけじやない。きつとお妾三人は作って女中にだつて手を出してるさ、このフシダラ野郎！」

その時だった。涼し気なロバートの笑顔が、ふつと消えた。あまりにしんとした消え方だった。隣のイーサンがはつと顔を横に向けた。やがてロバートの唇がゆつくりと開き、重々しい声が空気に鳴った。

「今なんて言った？」

「何度でも言うてやるよ！ きつとお妾三人は作って女中にも手を出してるさ、このフシダラ野郎！」

パンダヒーローの荒い息が、重苦しい空気の中に大きく響いた。ロバートの美しい顔が、その空気の中、下へと沈み込んだ。そして、華奢な肩が小刻みに揺れた。揺れたかと思うと、次に白い手がブランデーグラスを思いつきり机に叩きつけた。

「ザケたこと言いやがってえ！ ぶつ殺すぞ、このクソガキ！」

凄まじく下品な発音で怒声を放ったのは、他でもない

ロバートだった。

「テメエ、畜生！ ぶつ殺してやる！ 妾だつて!! 女中がなんだつて!! テメエ、よくも俺をコケにしやがったな！ 俺は女は一度だつて……!! ああ、畜生、チクショウ！ おい、誰か！ 誰かいねえんか！ とつととで……どこからドスを持ってきやがれ！ コイツのドタマを今すぐ勝ち割つてやらあ!!」

パンダヒーローは、先ほどの激しい怒りも忘れてぼかんとロバートを見た。彼の優美な顔は、激怒で黴だらけになり、ふつくらとした唇からは官能の言葉ではなく、汚い下町英語の暴言がとめどなく溢れ出ている。最早美しき豪商などではなかった。「ぶつ殺す！」だの「ドチキショウ！」だのと喚き続ける彼は、まるで泥酔した下品な貧民の男に見えた。

「やめねえか、ロバート！」

続く汚らしい発音で喋ったのは、イーサンだった。

「子供相手に怒鳴るなんてえ、ほれ見ろ、すつかり驚いちまつてるじゃねえか。大体、こん子はおめえのことなんも知らんのに、怒るなんて可哀想や。言われて嫌なことあるんなら、ちゃんと自分のこと知ってもらわんと」

イーサンの言葉は、ロバートのそれに負けず劣らず汚かったが、おつとりと穏やかな響きが含まれていた。パンダヒーローはその彼の暖かな口調にも、声には出さずに驚いた。

「それは……そうかも知れんな……」

ロバートが途端に恥ずかし気に俯いた。きまり悪そうに椅子に座りなおすと暫く額を押さえて何やら考え込んだ。しかし、やがて彼はそつと顔を上げて、パンダヒーローを真つ直ぐに見た。

「さつきはすまんかった、怒鳴ったりして。それでも俺には俺の人生つちゆうもんがある。おめえには、それを伝えておいたほうがええと思う……」

ロバートの顔は、さつきとは打って変わって静かで、噂通りの美しさを取り戻していた。しかし、言葉だけは相変わらず下町のものだった。パンダヒーローは、そんな彼の言葉を黙って聞いた。あれほど腹が立ったのも忘れて、彼の話を静かに聞かねばならない気が、彼にはしていた。

「おめえは俺を、貧しさの知らない強欲なクズ野郎だと思ってるんだな、違うか？」

「実際そうじゃないのかよ」

パンダヒーローは掠れた声で答えた。

「全く違えよ。むしろ、この街で貧しさの苦しみつちゆうもんを、一番深く知ってるのは俺とこのイーサンだ」

ロバートがそっと微笑して答えた。彼の答えに、パンダヒーローは不思議そうに首を捻った。

「どいうことだ？」

「分からねえか？」

「ああ」

「なあ、おめえ、一度成功した人間は、その前もその先もずつと輝かしいと誤解しとるよ。おめえはな、人間つちゆうもんをよく見とらんのさ」

誰も彼の言葉を阻まなかった。パンダヒーローでさえそうだった。今はただ、部屋の静けさとともに彼の語りを待った。

「ああ、二十年くれえ前か。そんな時はな、俺もイーサンも貧困に喘ぐブラフマー街の連中の一人だった」

パンダヒーローは短く息を吸った。喉を引き攣らせ、着ぐるみ越しに高そうな葉巻を手につくロバートと、そ

の隣のイーサンを見つめた。

「俺が生まれたんは、ブラフマー街の寂れた娼館だった。俺ン母ちゃんはそこ場の娼婦で、病気持ちの金にならん人だな。それでも優しくて穏やかで、俺あ母ちゃんが大好きだった。でもそんな母ちゃんも、俺が三つか四つの時に病で死んだ。痘痕だらけの顔してなあ。あん頃の俺あ、痩せつぼちで虱だらけの汚いガキだったから、母ちゃんが死ぬとすぐに娼館を叩きだされた。それから地獄さね。俺あ、ほんのガキの頃に独りぼっちで生きたやならなかった。ゴミを漁っちゃあ、食えそうなもんは何でも口に突っ込んで、固い地面の上で寝て。まともな飯が食いたきゃあ、殴られるの覚悟で盗むか、自分よりも弱い子から取り上げるしかねえ。気味悪いくれえ瘦せたガキが腹減った、腹減ったと泣いても、誰も助けてくりやあせんかったもの」

ロバートは眠たげに目を閉じた。

「こんな辛さの中で、俺あしたすら神様にお祈りしたさ。

でもしもじさを何とかしてくれて頼んだんじゃねえ。

俺はこう祈ったんだ。神ちゃま、神ちゃま！ 撲をもう一度母ちゃんに合わせてくたせえ！ 母ちゃんに会えるんだつたら、僕、お腹が空くのも我慢しやす！ でも、神ちゃまは俺を無視し続けた。だから俺あずつと独りぼっちだった。誰に分かってもらえることも、愛してもらえないこともなかった。だけど、自分で死ぬなんてこと知らねかったから、仕方なく生き続けた」

そして彼は優しく微笑して、イーサンの肩に手を置いた。

「でも、俺が六つになった時、赤ん坊だったイーサンに

出会った。それから二人だ。俺あ六つでパパになったわけだが、それでも懸命にコイツを育てたさ。それでも、食うもんが増えるわけじゃねえから、苦しさはずつとつき纏った。俺もイーサンもやせ細って体中に垢溜めて、虱だらけの頭で地面さ寝転がってた。けどな」

だしぬけに、ロバートが強く目を見開き手の中の葉巻を強く握った。先ほどとは違う意味の微笑を口唇にのみ浮かべる。

「俺あ、もう少し賢く生きる方法を見つけたよ。ほら、これだ」

そして彼は自身の滑らかな白い頬に手をやった。

「俺あある日、自分が綺麗だつちゆうことに気づいた。

そしてそれが利用できることも。それからよかつた。俺あ、地面に寝転がっておてんとさんを押んでるだけでパンをもらえるようになった。こうして純潔をなくすことで俺とイーサンは飢えから抜け出した。八つかそこらで体売って、俺あ生き延びたんだ。段々と暮らしは良くなっていった。生ごみがご馳走だった頃と比べりや大したもんだらうが、ええ？ こうして売春だけでも十分食えるようになった。でも、でもな、俺はそこで終わったりはしなかった」

ロバートが震える吐息を唇から吐き出した。彼は血の気のない顔を下に向けると、やがて何かを決心したかのような声で続けた。

「私は上を見上げるようになった。そしてそこを目指した。あの頃の俺は、ただ顔が綺麗なだけの男娼で終わるわけにはいかなかったんだ。あちこちのマフィアに近づいては次々と関係を結び、私は着実に、今いるこの場所へと向かっていった。イーサンもこれまた……これまた使えてね。彼はたった十二で立派な暗殺者だったが、そ

の腕を買われてた皆さんの金が転がり込んだ。もちろん、平坦な道では決してなかった。殴られたことも、殺されかけたこともたくさんあった。立派な服を着れるようになったても、その下の肌は傷だらけだった。たくさんの人に嫌われ、罵られ、バカにされ……だけど、私は諦めなかった。私はただ振り返ることもなく上を見続け、歩くことをやめなかった。そして……」

下向けられていた顔が弾かれたように持ち上がった。うつすらと美しく悪賢い、思い描いたままのロバート・クロスの顔が目前にあった。

「私はどうもこの街最高の権力を手に入れた！私を踏みつけバカにしていた奴らはみな、私の足元にひれ伏し、逆に私に媚びを売り始めた！こんな痛快な人生が他にあるか、ええ!! でも私はやり遂げたんだ！自身自身の力で、汚くとも自分自身の力一つで！」

パンダヒーローはそつと顔を下に向けた。自分の小さな顔が、熱く火照った。しかし、最期の勇気で小声でつぶやいた。

「つまり、あなたは何の代価もなしに贅を極めてるわけじゃないんだな」

「ああ、その通りだ」

「でっ……でもさ！」

彼は俯けていた顔を弾くように上にあげた。

「あなたがそんな風に苦労したんなら同じように苦しんでる人の気持ちも分かるだろ!! たくさんある内の少しを分けるだけで、過去の自分と同じような境遇の人を救えるんだぜ!!」

「まだそんなことを言うか、君は」

ロバートの青い瞳が、怒りで赤らんだ。

「ああ、もちろんこの街にかつての私のような人間がた

くさんいることも、彼らの苦しみも人一倍分かる。でもな、そんな苦しみは私の物とは別の苦しみだ。人の人生はその人自身のものなんだ、一体私に何の関係がある、ええ? 私は私の人生だけを懸命に生きてるんだ。自身の答えを見つけて、私自身の力一つで、私の心に従って生きてるんだ! それがそんなに悪い事か!! いいか、私の人生を作るのは私だけだ! でもそれは誰だって同じこと! 人の人生はその人だけのものだ! だから私は決して人の生き方にケチを付けたりはしない、それはその人だけの正しさなのだから! その代わり、私は誰かの苦しみに関わったりはしない! 自分の苦しみを決めて、それをどうするかを決めるのは個人の責任だ! それを妨害する権利は私にはない!!」

ロバートは荒い息をして、パンダヒーローを一層強く睨みつけた。

「だがな、私が唯一嫌いだと言える人生を送っているやつらがいる。お前のような人間だよ」

そして、彼はさらにまくし立てた。

「てめえがただ生まれつき上級英語を話せるだけの人間だったら、俺は何とも言わねえさ! でもな、お前は俺の人生そっくりそのまま否定しやがった! しかも、他の人間も助けるとききた! 大層な口を利いたもんだな、ええ、このクソガキ! てめえは俺の生き方に意見する権利があるか!! 俺を蔑むだけの資格があるんか、ええ!! ないさ、あるわけない。いいか、クソガキ、よく聞けよ。俺はてめえのようなヤツを蔑む権利を持つてるんだ。その権利ってのはな、踏みつけられ罵られ、それでも諦めずに立ち上がって突き進んで、初めて手に入れるんだ! だが、てめえはどうだ!! 誰かの生き方を決められるほど立派なことを成し遂げたのか!! 俺はな、そ

ういう権利を持つ資格のない人間が当然のように俺にだけえ顔をするのだけは、堪らなく嫌いなんだよ!!」

最早パンダヒーローは何も言えなかった。着ぐるみの中で再び顔を下に向け、改めてロバートが三十二歳であること、そして自分が十五歳であることを思い出した。三人の間に重苦しい空気が流れた。

「ロバート」

突然静かな声が沈黙の間に置かれた。口を開いたのはイーサンだった。

「いくら何でも、言い過ぎだよ。可哀想じゃないか。この子はまだ若いんだし、そんな答えすぐに見つけられるわけないだろ?」

ロバートがはつとして彼を見つめた。心底から驚いた顔で、彼はパチパチと長い睫毛を開閉させた。そんなロバートに構わず、イーサンはパンダヒーローに優しく微笑みかけた。

「何かロバートに言うことがあるんじゃないか、パンダヒーロー?」

パンダヒーローはうつ向いたまま、小声で言った。頬が熱く火照り、目じりはすっかかり垂れ下がっていた。

「さっきは失礼なこと言ってごめんなさい、ミスター・クロス」

「いや、まあ、その、いいんだ」

ロバートの方も、先ほどの怒りも露わにした表情を、きまり悪そうな表情に変えていた。

「こっちこそ悪かった。ついムキになって。だが君の仕事にはとても感謝している。報酬は後日そっちに届けよう。一万ドルだったな。これからも何かあれば君に頼むからよろしく」

「ああ、そりやどうも」



パンダヒーローはなぜか、先ほどまであれほど腹の立つたロバートに、おっとりとした気持ちを抱いていることに気づいた。彼の真珠色の肌が、今では随分と暖かい薔薇色に染まって見えた。

「……は……」

パンダヒーローは意図せず出た言葉に自分でも驚いた。たちまち二人の訝し気な視線に晒されたが、彼は思い切つていった。

「ミミはいい子だよ！」

ロバートがキョトンとした顔で「はあ、そう」と軽く答えた。パンダヒーローはそれを聞いて慌てて続けた。

「いや、その、ミミはいい子だよ！ 家事も勉強もできるし、挙句には錠前破りも！ それに優しくて、明るくて、おまけにその……かわいいし……でもそれってつまりあんた達が……！」

「パンダヒーロー」

ロバートが蚊の一匹でも追い払うかのように片手を顔の横でひらひらと振った。先ほどの決まり悪そうな顔は、社交場やカジノ向けの、冷めたものに変化している。

「さつきも言った通り、私は他人に興味はない。ミミはもう前金としてここから出て行った身だ。もう私とは何の関係もない」

パンダヒーローはさすがごと引き下がった。先ほどまで近い存在のように感じた彼が、急に遠のいたような気がした。

（でも、遠のいたというより元に戻っただけなんだよな……）

そう思ったが、彼はもう怒りを覚えることはできなかつた。ミミを「他人」と軽々しく呼んだことはもちろん腹立たしいが、それでも、二人の肩や骨盤が服越しでも

分かるほど骨ばっているのがやたらと目に入るのだ。パンダヒーローは肘掛け椅子の前で、心持ち頭を下げた。

「失礼します、ミスター」

と、小さく言うと、彼は書斎を出て行った。

パンダヒーローの去った後、書斎にはロバート一人が残っていた。先ほどまで一緒だったイーサンまで、彼の後に続いて部屋の外に出て行ってしまったのだ。

ロバートはだらしなく長椅子の上に寝そべると、額を押さえて大袈裟なため息をついた。

その時、突然ノックもなしに書斎の扉が開いて、でっぷりと太った黒人の男がにゅつと顔を出した。

「大きなため息ですねえ、旦那様」

「ヴィンスレットか。何の用だ？」

ロバートは彼の馴れ馴れしい口調を咎めることもなく、気だるそうに答えた。この太つちよは、部下達の中でも特にロバートの気に入りだったのだ。

「お客が帰ったから書斎のグラスを片付けて来いってミリーさんにどやされちゃって」

ヴィンスレットは太った丸い体を揺すりながら、小卓の上の瓶やらグラスやら灰皿を、手の上の丸盆に乗せ始めた。

「全然飲んでないじゃないですか」

「計算が外れてね。相手がたった十五歳の子供だとは知らなくて」

「へえ、あのパンダさん、そんなに若かったんですね。でもそれが何かマズいんですか？」

「マズいさ。かなり」

ロバートの気はヴィンスレットを前にして、すっかり緩んでいた。この太つちよになら、自分の胸の内を打ち明けても構わないだろう、そう彼は思った。

「あんな分別のつかない子供がこれから先やっていけるだろうかね……」

「この街の子供はみんなしっかりしてますよ」

「困ったもんだねえ」

ロバートはひじ掛けに乗せた足首をぶらぶらと上下に振った。その時、ズボンと靴下の間の白い肌がチラチラと覗いていたが、ヴィンスレットは特別気にも留めなかつた。

「それにしても、さつきは言い過ぎたなあ」

「ひどいこと言っちゃったんですか？」

「喋り過ぎちゃったんだよ、余計なことを」

ロバートはやがて、足首のスイングをそつと止めた。ぼんやりと弛んでいた臉が、いつの間にか強く引き締まっていた。

「ヤツはきつと、俺の手足では終わらないだろう。ただの宣伝方法ではなく、それ以上の何かになるはずだ」

「それは……困りますね」

「うーん……」

ヴィンスレットは怪訝そうな顔で、眉間の皺を揉んでいるロバートを見つめた。自分の「困った」と、この人の「困った」は何か違うものではないか、そんな気がしていた。

「そういえば、来る途中でイーサンに会わなかったか？」

「ああ、若旦那様ならパンダヒーローを追いかけて歩いていきましたよ」

「そうかい」

ロバートがごろりと寝返りを打った。カサリと言う音

がして、ヴィンスレットが身を屈めた。

「旦那様、何かポケットから落ちましたよ」

名前を呼ばれて、パンダヒーローは立ち止まった。随分若々しい声で彼を呼び止めたのは、イーサン・カーターだった。

「出口分かるか？ 一緒に行こう」

二人は並んで歩き出した。着ぐるみの中で、パンダヒーローはイーサンの横顔をちらりと見た。ほっそりとした瓜実顔、神秘的な瞳、豊かな黒い巻毛。

（かっこいいなあ。女の子が夢中になるのって、こういう男の人なのかなあ）

「何だよ、じろじろ見て」

イーサンが笑って言った。それを聞いてパンダヒーローはぎくりと身を引き攣らせた。どうして分かったんだろう？

「昔から人の気配を読むのが上手くてね」

これまたパンダヒーローを驚かせながらイーサンが言った。

「なあ、パンダヒーロー」

くすくすという笑い声の後に、イーサンがほんの少し静かな声で話し始めた。その声は、初めて会った時の彼の声そのままだったが、しかし木枯らしのような乾いた声に、ほんの少し春風が混じっている気がした。

「ロボットの言ったこと、気に病むことないからな。苦労した人間がいるからって、それでお前の人生がダメになるわけじゃない。あの人も言ってたけど、お前の生き方はお前のものなんだから」

パンダヒーローは驚いて彼を見つめた。イーサンは引

き締まった目じりをほんの少し垂れ下げて、前を見ながら話し続けた。

「今のお前に必要なのは、他人を知ることじゃなくて自分を知ることだよ。他人の考えは、あくまでも自分を測るための指標だ。一番大切なのは自分の心だよ。自分の心だけに正直になるんだ」

イーサンはそこで一つ呼吸を置き、寂しそうに呟いた。「俺はそれが出来なかったからなあ。俺はただ、ロボットと一緒に上りの坂を駆け上がって行くだけだった。今更どうにかしようと思っても、もう遅い」

二人はやがて玄関口に着いた。夜の深い扉の外には車が一台着けてあり、運転手が扉を開けてこちらを見ていた。しかし、パンダヒーローはイーサンの傍を離れようとはしなかった。今丁度、イーサンの瞳が、二重瞼の線がくつきりした大きな瞳だと気づいていたのだ。

「なあ、パンダヒーロー」

イーサンがおずおずと彼に話しかけた。

「お前は……君はどうして暗殺者を始めたんだ？」

パンダヒーローは途端に、彼のぱっちりとした大きな瞳や、電球の光を受け暖かく染まった肌が怖くなった。大きな着ぐるみの頭の中で、ジョッシュ・ワイルダーの小さな頭が彼の視線を避けるように下を向いた。

「それは……えっと……」

イーサンが心配そうに顔を傾けた。そんな彼の、気遣うような顔さえ、今のパンダヒーローには心地悪かった。「ごめん、カーターさん。俺、もう遅いし帰るよ」

この場を切り抜ける最善の言葉を、彼は口から出した。イーサンはしばらくパンダヒーローをじっと見つめていたが、やがてそっと片手を上げて言った。

「そうか。じゃあ、またな」

道路を滑っていく車の中で、パンダヒーローは身をよじってバッグドアガラスの外を見た。ずんずん遠ざかっていくヴァルナの塔の玄関口には、イーサンがまだ静かに佇んでいた。俯き加減の顔から、灰色の目だけをこちらに寄越して、いつまでもパンダヒーローを見つめていた。

夜が明けて、ミミはすぐに洗面台の鏡に向かった。これは住処が変わった日からの新たな習慣だった。

顔を洗って歯を磨くと、入念に髪をブラシで梳かす。寝ぐせをとことん撫でつけると、次はたっぷりとした髪をきっちりとして三つ編みにしてリボンで縛った。

「相変わらず赤っ茶けた髪ねえ」

ミミは鏡の中の自分にしかめ面をした。そばかすだらけの頬に、真っ赤な三つ編み、見栄えのしない顔。例の彼は「赤毛のアンみたいで素敵じゃないか」と言ってくるけれど、ミミは自分の外見に不満たっぷりだった。

なぜか、彼と暮らし始めてから、自分の容姿のコンプレックスが一層強くなった気がする。しかし何よりミミにとって気に入らないのは、あのろくでなしのロボット・クロスとイーサン・カーターの方が、自分よりも格段に美人で、お姫様のように華やかな髪と瞳の色を持っているということだった。

彼女はげんざりため息をつくと、同居人を起こしに向かった。

一時間して、二人の住人は朝食のテーブルを挟んで座った。ミミは右手にトーストを持ったまま、ぼんやりと向かい側の三つ年上の少年を眺めた。彼は丁度、マグカ



ツプの熱い中身を飲もうと顔を傾けている所だった。彼の目の下にはうつつら隈がある。普段着ている着ぐるみを脱いでいるので分かることだった。

「ジョッシュ」

と、ミミは少年に向かって言った。少年は……元はパンドヒーローと呼ばれていたジョッシュ・ワイルダーは顔を上げてミミを見た。

「よく眠れなかったの？」

「ん……」

ジョッシュはカップの中身を空けずに頭を掻いた。いかにも眠たそうに言葉を濁す彼に、ミミはいささか腹を立てた。

「だってあなた、昨晚遅くなつたうえに夕食も食べずに寝ちやつたじゃない。疲れてるのかなあつて」

「ああ、別に……大丈夫だよ」

ミミは不満げな顔を消して彼をじつと見つめた。

「ねえ、ジョッシュ大丈夫？ クロスさんの所で何かあったの？」

「何かっていふかなあ……」

ジョッシュは静かにカップを置いた。彼の頭の中を、あの汚い言葉で自分の過去を語ったロバートと、そしてじつと自分を見つめていたイーサンの姿が浮かんでいた。あの二人の面影が、いつまでたってもジョッシュの頭を離れなかった。

「昨夜、あの人達の過去を聞いたんだ。それを聞いたら、なんていうか、自分がすごくくちっぽけで甘えたガキのように思えて……なぜか、あの人達を前のように嫌いは思えなくなつてしまつたんだ……それで一晩中まんじりともしなかつたわけさ」

「まあ！」

ミミが手からトーストを取り落とす。

「ひどいわ、ジョッシュ！ あの人達の肩を持つていうの!! 私を捨てたあの人達の！」

「いや、それは……」

「過去がなんだつていうのよ！ ええ、もちろんあの人が達がものすごく苦労したつていう話は聞いたことあるわでも、昔苦労したら今は何をやっても許されるの!! 私にはね、いくらあの人達の過去が暗いものだとしても、あの人達のやつたことは許さないわ！ 私を捨てたつていう事実は消えないし、あの人達が殺した人も戻つてはこないのよ！」

「で、でも、君を前金にするつて決めたのはクロスさんじゃないか。少なくともカーターさんは酌量の余地があると思つけど」

「ないわよ！ あの人は私にだんまりを決め込んだのだもの！ 何もしてくれなかつた人は、何かした人と同罪よ！」

ミミが言い終えると、ジョッシュは泣きそうな顔を下を向いた。そのくたりと垂れ下がった眉尻を見て、ミミは怒りを収めてそつと彼の手に触れた。

「やめましょう、あなた。過去になんか拘るのは」

二人はそつと見つめ合った。

「確かに私、あの二人のことは変わらなかつた嫌いだけど、今はそんなことよりあなたとの時間を大事にしたいのよ。だから、ジョッシュ。あの人達よりも私の方を見て」

ジョッシュは、やがて安らいだように微笑んだ。その顔を見て、ミミは嬉しくなった。

「そうだね。ありがと、ミミ。俺も君のことが大事だよ。それだけは決して迷つたりしない」

二人は朝食の残りに取り掛かり始めた。ジョッシュは、

もう素直にコーヒーの味を楽しむことが出来た。しかしそれでも、昨夜いつまでも自分を見送つていたあのイーサン・カーターの姿だけは、どうしても忘れることができなかった。

契約が果たされたのは、午後に近い時間、二人が昼食の準備に取り掛かり始めた時だった。中の綿がはみ出たソファの上で足を投げ出して寝そべつていたジョッシュが、さつと身を起こして玄関の方角を睨んだ。扉が細く開く僅かな音を聞き取つたのだ。鍵を開けっぱなしにしていたのを後悔しながら、彼は金属バットを携えて廊下を進んだ。背後にはミミがぴつたりくつついてくる。玄関の扉に近づいた時、ジョッシュは心身の緊張をふつと解いた。

玄関口にずつしりと重量を持ったトランクケースが二つ置かれていた。それを見て、ジョッシュは誰の仕業か、そしてケースの中身がなんであるかを理解した。一応扉を開けてみたが、外には誰もいなかった。だが、地面に車のゴム輪の跡が残つていた。

(サンタクロスみたいなことするんだなあ)

と、ジョッシュがぼんやり思つてみると、後ろでミミの眩しい声が上がつた。

「わ、わあ！ 見て、ジョッシュすごいわ！」

玄関を振り返ると、ミミがトランクを開けて、中の札束を見て目を白黒させていた。

「うっわあ、すごい数！ 私、こんなにたくさんのお金見たの初めて！」

「約束の報酬だよ。ぴつたり一万ドルさ」

無邪気に驚くミミに、ジョッシュは少し気取つた物言

いをしたが、実際彼もこれほどの大金を貰ったのは初めてなので、心の中ではミミと同じだった。

二人はうめき声を上げながら、半場引き摺るようにしてケースを居間に運んだ。最後の一踏ん張りで限界が来たミミは乱暴にケースを放した。ドスンっという音と共に、半開きの口から札束がいくつか零れた。

「ねえ、ジョッシュ。こんなにたくさんのお金一体どこにしまいの？」

ミミは荒い息をしながら聞いた。

「ああ、普段貴重品はあそこ、ほら、床板が緩んでる所があるだろ？ あそこの下に隠すようにしてる」

「まあ、床下に？ でも銀行かどこかに預けないと用心じゃないかしら」

「それなら心配ない」

ジョッシュはミミがへたり込んでいる床に並んで座って爽やかに笑った。その顔を見て、ミミはそつと顔を赤くした。

「俺はこのヴィシユヌ街では結構好かれててさ。俺が仕事で関わるのはシヴァの金持ちばかりだから、ここではただの剽軽物として通ってるし、友達も多いんだ。だからこの街で、俺の家に押し入って金を持ってくやつなんていないのさ」

「あら、殺し屋ってのは大抵世間に隠れて暮らしてるものだと思うんだけど、あなたは随分フレンドリーなのね」

「そりゃ、味方を増やすに越したことないからね。どんな仕事にも人望はつきものさ」

やがて二人はケースの中の札束を数えにかかった。ジョッシュはミミの金勘定のスピードに驚かされた。自分が五枚数える間にミミは十枚数え、凄まじい速さで合計金額を暗算して出していくのだ。

「よし、これで全部ね！」

ミミが最後の一束をテーブルに置き、帳面に数字を書き込むと大きく伸びをした。ところが、ジョッシュは怪訝そうな顔をして、依然と空のトランクの中を眺めていた。

「いや、ミミ。まだ残ってるぞ」

「え？ 計算はぴったりだったはずよ？ きっかり一万ドルだったもの」

「それがこのトランク、二重底になってるんだ」

ジョッシュはトランクの底板を持ち上げて見せた。すると、その底板の下から、ぎつちりと詰まった札束が姿を現した。

「間違えて入れたのかしら」

「だとしたら、こんなところにわざわざ入れたりしないよ。それにまあまあ大金だし……」

「それもそうよね。待って、何かあるわ」

ミミは紙幣を束ねている紙帯に挟まっている紙切れを見つけて取り上げた。覗き込んで見ると、蜘蛛がおたおた這いまわったような文字が鉛筆で書かれている。

「きつたない字だなあ」

と、ジョッシュは思わず呟いた。ミミはその文字を難なく読み上げた。

「これは報酬とは別のお金です。生活の足しにしなさい。……ですって」

「なるほど。俺ってそんなに貧乏してるように見えるのかなあ」

ジョッシュはぼりぼりと不満そうに頬を掻いたが、やがて何かを思いついたかのように心の中で呟いた。

（だけど、人殺しで貰ったお金なんてミミは嫌がるかもしれない。だったら、こっちのお金を貰えるのは案外あ

りがたいんじゃないか？）

「なあ、ミミ」

ジョッシュは明るく彼女に言った。

「明日一緒に出かけよう！ で、街で買い物するんだ！ お前の家具とか新しい服とかまだ揃えてないしな！」

「そうね」

ミミは顔をジョッシュの方へ向けて笑い、紙片を強く握った。

翌朝、ミミは床下から、昨日二重底の下にあった紙幣を取り出してビーズの財布に入れた。荷物の準備が終わると、最期にミミは鏡の前で身だしなみの確認をした。

持っている服の中で一番綺麗な、白と萌黄の格子柄のドレスを着て、普段はお下げの髪を華やかに編み込んで結い上げている。手首には貝殻のブレスレット。少し背伸びしてオレンジ色の口紅もちょっぴり着けた。

「今日はまるでお姫様みたいだなあ」

日の当たる街路を並んで歩くジョッシュが笑いながら言った。

「いやだわ、こんな不器量をお姫様だなんて」

「何言ってるんだ、十分素敵だよ」

ミミはくすぐったい気持ちになって下を向いた。ジョッシュに褒められたのが嬉しかった。しかし、いくら彼が嬉しい事を言ってくれても、ミミは一つだけ彼に不満を抱いていた。

彼は今日、きちんとパンダの着ぐるみを着て、パンダヒーローになっていたのだ。それがミミは面白くなかった。初めての男の子とのデートなんだから、こっちは早起きして目いっぱいお洒落したのに、なぜ彼は普段のま

まなんだろう。

(女心の分らない人ね)

と、ミミは胸の内で言った。

「だって仕方ないだろ」

そうジョッシュは、ふくれっ面のミミに言った。

「いくら街の住人と仲がいいからって、俺はみだりに素顔を晒したりはしないからさ」

「でも私には晒したじやない」

「いや、それは、その……特別だからだよ」

今度は二人同時に黙りこくった。

ジョッシュは初めてこの街道を一人で歩いた時と同様道行く人々と親し気に挨拶を交わしてヴィッシュヌ街を闊歩した。人々はミミにまで、にこやかに片手を上げ、その都度ミミも恥ずかしそうに会釈を返した。

やがて二人は、ジョッシュの馴染みだという家具屋に入り、女の子向けの小さなベッドと机と椅子を買った。

ジョッシュは店主に後日自分の所へ届けてくれるよう頼み、店を出た。

その後、二人は服飾店に入ってしまった。ミミはジョッシュに自分の服を見立てて欲しいと頼んだ。女の子の世事に疎い彼は、おっかなびっくり、鮮やかな緑色の服を選んだ。「君の瞳の色と同じだから」と、彼は照れながら言った。

店を出たところで、金髪の眼が冴えるほど美しい娘が一人、ジョッシュに親し気に話しかけてきた。二人が楽しそうに会話を弾ませるのを見て、ミミはたちまち不機嫌になり、彼を早々に引つ張っていった。

ジョッシュは、すっかり拗ねてしまったミミの機嫌をとろうと、彼女を近くの飲食店へ連れて行った。大きなガラス扉を開けて、ミミは店内の騒々しさにさつき自分

が不機嫌になっていたのも忘れて目を丸くした。

その中は、まるで小さな地球だった。ミミのように、肌の白い人間だけではない。真っ黒な肌もいれば、黄色の肌も赤い肌の人間もいる。顔の彫りが深いのも浅いのもある。そして聞き覚えのない呪文のような異国語で話したり、ポーカーに興じたり、若い女給に絡んだり、中には男同士、女同士で接吻を交わしたりしている。その誰もが肌の色や言葉に関わらず、同じテーブルについて食べたり飲んだりしているのだ。ジョッシュは、瞳を輝かせて固まるミミの手を取って席に着くと、さっそく食事を注文した。

店の人々はジョッシュを見つけると、彼に楽しそうに話しかけた。彼は飛び交わされる異国の言葉に、楽し気な英語で答え、会話を弾ませた。やがて、客や女給の興味は、次第にミミへと移った。

「あら、あんた今日は随分かわいいお連れがいるじゃないの。ガールフレンド？」

胸の空いた服を着た女給の一人が揶揄うようにジョッシュに尋ねると、彼は着ぐるみの中で盛大に咽こんだ。その様子を見て、女達は笑い転げ、男達は歓声を上げて彼の肩を叩いた。

ミミはこのひたすら騒がしく陽気な人々に安らぎを感じた。あの美しいけれど顔の前に氷の壁一枚隔てたようなロバートとイーサンとは違う、あけすけで情熱的な人々だった。

彼らは一頻り二人を揶揄うと、各々のテーブルに戻ってまた酒を呷り始めた。ミミとジョッシュは喧騒が過ぎ去ってしまったと、急に気恥ずかしくなって黙って俯いてしまった。ミミは、先ほどの女給の、「ガールフレンド」と言う言葉を何度も頭の中で反芻していた。

「よう」

二人がすっかり黙りこくっていると、突然頭上から声がした。

「アツアツの若いカップルの邪魔をするのは忍びないんだが、ちよっと相席してもいいかい？」

二人が驚いて顔を上げると、片手にグラスを持った、黒人のでっぷり太った男が笑って立っていた。仕事の途中なのか、黒い背広をはち切れんばかりに太つちよな体に着ている。

「え、ええ、どうぞ」

ジョッシュがどもりながらも快く答えると、彼はまたひと際陽気な声で礼を言い、その大きな尻を一人の向かいの椅子に乗せた。

「いやあ、参ったよ。ちよつとランチに出ただけで、どこもかしこも混んでさ」

そう言うと、彼は女給を一人呼んで、捲し立てるよう注文をした。そしてぼつちやりと太った体を揺すって、浅黒い額に浮かんだ汗を手巾で拭いた。ミミは何やら、大きな熊を相手にしているような気がして、ふふふっと笑った。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？俺がクマか何かに見えるかい？」

男はミミに片目をつぶって話しかけた。男の明るく包容力のある様子に、ミミはすっかり気を許して答えた。

「あら、すごいわ。あなた人の心が読めるの？」

「当たってるみたいだな。何、お嬢ちゃんの心を読んだわけじゃないさ。ただ昔から言われてるんだ。まるでデイベアみたい！ってね」

三人は声を上げて笑った。確かに彼のぼつてりと突き出した腹や、丸く人懐っこそうな黒い目は、デイベアに

よく似ていた。

(悪い人ではないな)

とミミとジョッシュは思った。男には不思議な魅力があった。顔立ちの美しさではロバートやイーサンの方が格段に秀でているはずなのに、あの二人にはない調理ストープの湯気のような温かさが、彼を大変魅力的に仕立てていた。

「ああ、そう言えば自己紹介が遅れたな。俺はボブ。ボブ・ヴィンスレットだ。よろしく」

二人は差し出された黒い右手を取った。ボブは順々に握られる手を軽やかに振ると、二人が名乗ろうとするより早く口を開いた。

「ああと、お前さん達のことは知ってるぜ。まず、そちのは最近話題のパンダヒーロー。で、お嬢ちゃんはミミだろ？」

ミミは驚いて目を見張った。ジョッシュはともかくとしてどうして自分の事をすでに知っているのだろうか？

「どうして私の名前を知ってるの？」

ミミはそのまますでに尋ねた。ボブはそれを聞いて、運ばれてきたコーンブレッドにピーナツバターを塗りながら、一言こう言った。

「お嬢様」

いたずらつ子のような笑顔とウインクがミミに向けられた。

「いつかヴァルナ社のビルの書齋で、あなたに高いところにあった本を取ってあげたデブっちょのことをお忘れですか？」

ミミは、はっとして口を押えた。ごくごく最近の記憶が、頭を素早く駆け巡った。

そうだ、あれは確か三か月前のこと。書齋に太った黒

人の男がいて、その人に本を取ってもらったことがあった！

「まあ、私すっかり忘れていたわ！ あの時の人だったのね！ それであなたはもう私のことを知っていたのね！」

「正解ですよ、お嬢様。いや、もうミミでいいかな。すまんね、ちよっと押揃ってみたくなくて」

「えっと、それはつまり……」

二人の会話にジョッシュは口を挟んだ。

「ボブ。君はあのヴァルナのビルで働いてたってことかい？」

「そうだよ。ていうか、今もそうだ。俺は結構最近、ヴァルナ社で働き始めてね。だからミミともあまり関わりがなかったんだ。忘れてたとしてもしょうがないことさ」

ボブは屈託のない笑顔で二人に優しく言った。

「俺はこう見えて銃の名手だね。家族でこの街に引越してきた時に、たまたまあのイーサン・カーターに見込まれて、ロバート・クロスの警護員として雇われたのさ」

「そうか……あの二人に……」

「ああ。有難いことだよ。あの人は俺に中々の給料をくれるしな」

「なんだか、残念だわ……」

ボブの言葉をミミが遮った。彼女は悔しそうな顔で独り言のように呟いた。

「あなたみたいないい人が、クロスさんやカーターさんの配下だなんて……」

「おや、それはどうしてだい？」

「だってそうじゃない？ あんなろくでなしの警護をするためにあなたみたいな素敵な人が使われるなんて、なんだか私残念だわ」

「さて、それはどうだろうな」

ボブが齧っていたコーンブレッドを皿に置いた。

「ミミ。確かに君がそう言うのも頷ける。けどね、二人とも。俺はミスター・カーターとミスター・クロスには並々ならぬ恩義があるんだ」

「恩？ あの二人に？」

「ああ、そうだ。いいかい、二人とも。物事つてのは真つ直ぐ見ちゃいけない。物を見る時には八方美人になることが大事なんだ。疑ってかかって、斜めから見たり、ひっくり返したりして見て初めて、物の本当の姿ってのは分かるんだ」

彼は指についたピーナツバターを綺麗に舐めとり、その子供らしい仕草に似合わない声で、静かに語りだした。

「ここに居る人達をよく見てごらん。白人だけじゃなくて、いろんな人種の人がいるね。ミミ。ヴァルナ社もそうじゃなかったかい？ あそこではワズプ以外の人も大勢働いてて、中には同性で付き合ってるものもある。ここではそういう人達は特に珍しくともないが、でもね、この街の外じゃ到底あり得ない光景なんだぜ？ 例えば俺は肌の黒い黒人だが、この街では当然のようにホワイトカラーに収まって、ヴィッシュヌ街でそこそこいい暮らしを送ってる。だけど、ここから一歩外に出りゃ、俺はたちまち仕事を奪われ、差別され、バスの座席に座ることも許されない。つまり、俺はこの街でなら差別に怯えることなく、当たり前のように生活できるんだ。ところが、この礎を作った人こそ、あのロバート・クロスなんだ」

「あの人が……」

「そう。君達も知ってる通り、あの人はあまりいい評判はない。人間を道具扱いする非道な悪辣漢だったね。で

もね、その評価をひっくり返して考えて見ると、あの人の美德に気づくことが出来る。人を価値でしか見ない、それはつまり、人を決して生まれや人種で判断しないってことなのさ。あの人が見るのは、人の生まれではなく生き方だ。どう生きてきたかであの人は価値を見るんだ。だからこそ、例えどん底に生れ落ちてても、被差別者に生まれても、価値で判断される世の中だから、前を向いて歩いて行ける。だから俺は、俺を人種に関わらず雇ってくれたあのお二方に大きな恩があるんだ」

ボブはすっかり下を向いてしまった二人に、静かな声で諭すように言った。

「なあ、つまりこういうことなんだよ。一見ではものは決められない。そこに百見と百聞を重ねるんだ。そうして最後に自分の心に聞いて、自分の心をよく知るんだ。」

そうして出した答えを、ひたすらに信じればいい」

ジョッシュとミミは料理に手を付けるのも忘れて黙りこくってしまった。ジョッシュの中で、昨夜のロバートとイーサンの姿がもう一度臉の裏に昇って、彼の顔を着ぐるみの内側で下向けさせた。

ミミは、いつか自分がジョッシュの会う前日の二人を思い出していた。あの細められた目、優美に曲がった唇。彼らの姿にボブの言葉が重なったが、それでもミミは首を横に振って、服の裾をきつく握りしめていた。

それから二人は安飯を食しながら様々な話をした。ボブは、家族に年の離れた十一歳の妹がいる、と話した。

「トレイシーって名前なんだ。まだ小さいけど、なかなかの別嬪だぜ。年頃になりゃあ、恋人候補の男がずらりと押しかけるだろうさ。まあ、大概は俺の門前払いを食

らうだろうがな！」

彼が幸せそうに声を上げて笑うのを、ミミは羨ましく感じた。彼が妹を心から愛しているのが、ひしひしと伝わって来た。それはミミにとって、暖かく優しく穏やかで、そして時々痛かった。

ミミの臉の裏側に、ちらちらと点滅しながら映る物があつた。チョコレートのおみ紙だ。茶色く変色し、活字がぼやけて読めなくなったあの、紙。自分があの二人の元に残してきたあの紙。

ミミは驚いた。そして急に怖くなった。必死に、それ以上は考えまいとした。彼女は全く健康に気を使っていない甘ったるいだけのデザートを飲み込むと、ジョッシュの腕をとって立ち上がった。

「お話しできて楽しかったわ、ボブ。また会ったら食事でも一緒にしましょうね」

「こちらこそ、お二人さん」

ボブは口元をナプキンでちょこちょこと拭いた。その様子はやはり熊が人間の真似事をするのに似ていて、ミミは少しほっとした。ところが、ボブはそっとナプキンを置くと、急に深みを帯びた親のような視線を湛えて二人を見た。

「元気でな……」

ミミは大急ぎでジョッシュを引っ張っていった。ボブの、あの肉親がするような不安げな視線が、どうしようもなく怖かった。

家に着くと、ジョッシュが着ぐるみを脱ぐのを見計らい、ミミは彼に抱き着いた。彼の胸、腰、そして腕。ミミは胸に湧き上がってくる薄ら寒い思いを埋めようと、さらに強く彼にしがみ付いた。ジョッシュもまた、同じ思いを抱擁の中で、彼女に返した。

月日は流れた。

ロバート・クロスは相変わらずパンダヒーローを重宝していた。その一方で、彼の右腕として名を馳せていたイーサン・カーターは、次第に影を薄めていった。

「あの移り気の雄猫はさっそく飽きたのさ」

人々は、潜り酒場で周囲を見渡してからひそひそとう囁いた。

「風変わりでも若いのを食ってみたくなったんだろうよ。パンダヒーローも気の毒にな、いくら別嬪とは言え三十路の年増が相手なんて。あいつにはもう年頃の女の子の恋人がいるっていうのに、ひでえことするなあ、クロスをやつ」

当の本人、ジョッシュ・ワイルダーはそう言われることをひどく嫌った。ロバートとの関係をとやかく言われることは、彼との仕事について言われることよりも遙かに寒気のあるものだった。ロバートは今まで彼に色目を使ったことは一度もないが、それでもいつか、自分にもあの青い目を下から使うのだろうか考えると、ジョッシュはひどく不快な気分になった。

一九二七年も終わりに近づいていた。冬の間中、ロバートは頻繁にパンダヒーローを呼び寄せ、仕事を命じ、その度に溢れんばかりの報酬をくれた。暗黒街を新たに征服しようとする新興マフィア、ロバートの暗殺を企んだ共産主義の若者、そんな人々の血が、すべすべとした紙幣に変わっていった。

ジョッシュ・ワイルダーの床板は次第に、閉まらなくなった。床に溢れ出た札束を拾い集めていると、ジョッシュはひどく口数が少なくなった。自然に金の束を掴む手がブルブル震え、喉の管を通る息が詰まった。そんな

時はいつも、ミミの柔らかな手が彼の背に添えられていた。

俺は一体どうしたいんだろう。

ジョッシュは絶えず心に問いかけていた。隣の部屋から届くミミの寝息を聞きながら、ベッドに寝転んで何度も何度も。

彼自身の口から聞いた過去。イーサンの優しい目。そしてボブが語ったあの人の美德。それらを混ぜ合わせて考えると、どうしてもロバートに対する嫌悪の激しさが薄れてしまう。あの人の美しい顔が、昔の苦しみに微笑んでいる様を思うと、激しい思いが静かに収まっていく。

しかし一方で、大層平然として人殺しを命じるロバートは、やはり好きになれなかった。そしてそれ以上に、そんなロバートの命令に忠実に従う自分が嫌だった。彼は最近、殺しの命令も報酬の引き渡しも大変雑にこなす。その度にジョッシュは、パンダヒーローの内側の自分のことも、殺される人々のことも、ロバートは何も知らずとは思えないと思われられた。

まるで物言わぬバットになった気分だ。

彼はそう思う度につんざくような寂しさに襲われた。

価値で救われたボブのことを思い出しても、この寂しさはどうしても薄れなかった。

ミミは。

彼は穏やかな彼女の寝息を聞きながら思った。

俺の雇い主に捨てられ傷つけられたミミ。彼女はロバート・クロスの命令に従う俺を好きでいてくれるだろうか。本当は怒っているんじゃないだろうか。いくらボブにああ言われても、彼女はそう易々と彼らを許せはしないはずだ。なら彼女は、俺の大事なミミは、自分の本心を押し込めたまま、自分の憎い相手の手足となっている

俺を間近に見続けているんだ。

ジョッシュは上半身を寝台から起こすと、部屋の壁に立てかけられている金属バットを見つめた。バットに貼られた、二つの矢印のステッカーが、闇の中できらりと光った。

俺は一体何のためにバットを振るうんだろう。誰の為に殺し屋なんだろう。このままロバート・クロスに従い続けて、俺はこれから何になっていくんだろう。

彼は自分の利き手をだらりと寝台から垂れ下げて横になった。その晩、彼は無数の歯車が互いに噛み合っただけの夢を見た。

厳しい東海岸の冬が深まるある夜、パンダヒーローはロバート・クロスに呼び出しを受けた。久しく顔を合わせて会う事などなかった。彼はいささか驚いた。

(なんだろう、また戦勝を祝いにかいという類かな……) 心配そうな顔をするミミに、彼はなるべく明るく振舞った。そして彼女に短い別れを告げると、迎えの車に乗り込んだ。

あの日と同じ書齋だった。書棚の位置も椅子の向きも、床のペルシャ絨毯の模様の向きだってそっくりそのままだ。

でも、何かが違う。

パンダヒーローは扉を越えて三歩進んだ所で、強烈な違和感を覚えた。立ち尽くす彼を待っているのは、相も変わらずロバート・クロスとイーサン・カーターだった。ロバートが勧める椅子に大人しく座ると、パンダヒーロー

は、違和感の正体がこの二人だということに気づいた。出会った当初、血や鉄に見慣れ、冬の木立のように静かだったイーサン・カーター。そしてあの夜、穏やかで優しい目を向けていたイーサン・カーター。そのどちらも、今この場にはいなかった。今のイーサンは、ただひたすらに怯えていた。まるで鷹を警戒する栗鼠のようにせわしなくキョトキョトと眼球を蠢かせ、頻りに隣のロバートの様子を窺っている。膝の上で組んだ指をブルブルと震わせ、口の奥からは、奥歯を噛み合せているのがガチガチという音が小刻みに聞こえてくる。

その隣のロバートは、毒々しいまでに美しかった。以前は隙なく着ていた黒いスーツを艶めかしく気崩しているおかげで、襟元とタイは緩みに緩んでいる。その隙間から覗く皮膚はてらてらと湿っていて、まるで蝸牛の肌のようなだった。彼が美しいことはなんの変わりもなかったが、今夜はその程度が甚だしく、まるで三十年分の色気を一気に煮詰めて塗ったようで、パンダヒーローは言わずもがな不快感を覚えた。あの夜、汚い口調で彼を罵った人間らしいロバートは、くらくらするほど濃い、巴且舌のような体臭の霧の奥に隠れて見えなかった。

ロバートは、前髪と睫毛の下から眼球を上向け、パンダヒーローを見上げた。その見上げ方がまた一層不気味で、彼はさっと頭を下げて彼の視線を避けた。

「えっと……今日は一体なんの御用で？」

と、彼はどもりながら気まずく言った。ロバートは椅子の上で身をよじって、花のように笑った。

「会いたかったんだ。君にどうしても」

その声は、ボブやミミが出す声とは違い、明らかに媚びの含まれたものだった。花のような笑い方も、向日葵のようなボブの笑顔や、雛菊のようなミミの笑顔とは違

う。棘のある、摘み取るにはあまりにも危険な薔薇だ。

「君の仕事は実に素晴らしい」

完璧な発音でロバートは語った。

「君を引き入れたこの年の私の栄華は最高のものとなっている。誰もが白黒のヒーローと私を恐れ、最早対抗権力は無に等しい。酒の密造もようやく軌道に乗り始めた。今や私の所へ転がり込む金ときたら、想像もつかない額になっている。だが、それもこれも君のおかげだ」

ロバートは椅子から身を乗り出して、パンダヒーローの手に自身の右手を重ねた。彼の手は、着ぐるみ越しでははつきりと感じることは出来なかつたが、視覚がその感触を物語っていた。ぬめぬめとした脂肪で覆われ、指先のつんと尖つた、曖昧宿の女のような甲。対して掌は鋼鉄のように固い。

「そこでだ、パンダヒーロー」

ロバートは声とも吐息とも取れない程度で囁いた。

「日雇いの殺し屋なんかやめて、正式に私の右腕にならないか？」

彼は椅子から降りると、床に膝を付き、パンダヒーローの膝に形の慎ましい顎を摺り寄せた。ジョッシュは着ぐるみの内側で思いがけず頭を後ろに反らせた。冷たい汗が少年の背を覆い、呼吸が浅くなる。彼は、この格調高い男が床に這いつくばり、自分の膝に寄り添う様を震えながら見下ろした。自分の膝元にいるこの男が、あまりに美しく不気味なこの男が、あの日寂しく、それでも諭すように自身の暗い過去を語ったロバート・クロスなのだろうか。

「どうだい？」

と、ロバートが焦れたように言った。パンダヒーローは、怯えを振り払いようやく口を開いた。

「あ……あなたはこの前……俺みたいな人間が一番嫌いだって言ってた……違うか？」

「ああ」

「そ、それなのに、今度はそんな俺を右腕にしたいなんて言い出す……どういうことだよ……」

「なんだ、そんなことか」

ロバートは彼から身を離し、相変わらずにこやかに言った。

「ああ、確かに私は君の考えは嫌いだと言った。だが、飽くまで嫌いなのは考えただけだ。私はね、君が持つ価値は堪らなく好きなんだよ。だから何としてでも手放したくない。君を味方にするためなら、何だってしてやりたい。もつと報酬を増やせというのなら、好きだけあげよう。もつと美しい女が欲しいというのなら、私の馴染みをいくらでも紹介しよう。もしくは、私自身をやつてもいい。味方になるというのなら、無料で。どうだい？君の望みなら何だって叶えてやる。そうすれば私の嫌いな君の思想だって、改まるかもしれないしね」

パンダヒーローは、今までにないほどの嫌悪が体の奥底からせり上がってくるのを感じた。どんなに貧しい者と比べても、ロバートがひどく卑しく思えた。一瞬でも、この人の過去に、壮絶なサクセスストーリーに心を惹かれた自分が、例えようもなく腹立たしかった。

「俺をそこまで好いてくれるとは嬉しいね、別嬪さん。でもあんたにはもう右腕はついてるだろ？」

パンダヒーローは、嫌悪を怒りに変えて、噛み合わせた歯の隙間から絞り出すように言った。

「ああ、あれ」

ロバートは肩越しにイーサンを振り返った。怯えが頂点に達したのか、イーサンは泣きそうな顔で首を縮めた。

引き締まっていた眉尻は情けなく垂れ下がり、その様子は食いつかれる直前、捕食者の前足で転がされる小動物のようだ。ロバートは、そんなイーサンを一瞥すると、視線をパンダヒーローの元へ戻して言った。

「あれはね、欠陥品」

息をのむ音が二つ鳴った。イーサンは瞬きも忘れ、もとより白い顔を一層白くさせて、ロバートをぼんやり見た。パンダヒーローもまた同じだった。

欠陥品。

彼は心の中で反芻した。

(なぜ……なぜそんなことを……)

イーサン・カーターを、ロバートは欠陥品と呼んだのだ。使えない、役立たずの道具だと。イーサンをそう呼ぶ、成り上がりの急な階段を共に駆け上がってきた人を。彼にとつて何より大切な人を。彼は欠陥品と呼んだのだ。ところが、二人の胸中などまるで無視するかのようになり、ロバートは弾む毬の如く軽い口調で話し続けた。

「プロパガンダのおかげで大分敵も減ってきたし、もうお前をわざわざ使う必要はなくなつたんだよ。それにお前、近頃命令をしつかり実行できていなかったそうじゃないか。そんな抜けの多い右腕は要らないね。パンダヒーローだけで十分さ」

イーサン・カーターの白い顔に朱が昇り始めた。細長い指がわなわなと震え出す。

「なんでそんなこと!!!」

彼が叫んで立ち上がった。

「なんで！ なんでだよ、チクショウ！ 俺はずっと役に立ってきたのに！ 怖いのも、辛いのもみんな我慢してきたのに！ 全部全部、我慢したのに！ いい子にし



てたのに！」

顔の赤みが引き、彼の顔にまた怯えが現れ始めた。声が小刻みに震え出した。

「いやだ、ロバート！ 絶対にいやだ！ どこかへ行くなんてできねえ！ これ以外の生き方なんてなんも知らねえ！ お前はなんにも教えてくれなかった！ 教えてくれなかったのに！ なあ、ロバート。俺も同じなんか？！ 俺もただの道具でしかなかったんか？！ なあ、違えんだろ？！ そうじゃないんだろ？！」

彼はそれ以上口にできなかつた。ロバートがそつと彼の目の前に立った。イーサンが短く息を飲む。やがてロバートの細い腕が撓った。

次の瞬間、イーサンの左頬はロバートの右の掌に打たれ、重苦しい音を立てて傾いだ。イーサンは呆けた顔をして、二、三步後ずさると、床に崩れ座つた。

「クロスさん……？」

と、パンダヒーローがポツリと呟いた。ロバートは呆気にとられた顔をするイーサンに歩み寄つた。そして、彼の巻き毛を掴むと、思い切り床に顔を打ち付けた。激痛に、イーサンが叫んだ。

「クロスさん！！ 何やってるんだよ！！」

パンダヒーローが思わず立ち上がつて叫んだ。ところが彼の声など聞こえていないかのようには、ロバートは蹲るイーサンの腹を何度も蹴り上げた。

「痛い、痛い！ やめて！ 痛いよう！」

イーサンの憐れな叫びが、振り上げられる足ごとに響き渡つた。しかし何度も蹴り上げられるうち、イーサンは次第に叫ばなくなつた。ただ蛙のようにくぐもつた呻き声を上げるだけになつた。

「お前はもういらぬ！」

やがて、ロバートが息を切らせながら言い放つた。

「右腕は一つでいいんだ。イーサン・カーター。お前の使用期限はもう過ぎた。人は使えなければ何の意味もない。お前はもう私に何の益もたらさない」

「……」

「ついでにさっきの質問に答えてやろう。お前もミミと同じ道具だ。私がお前を育てたのは、この先使えそうだったからだ。今となつては後悔している。こんな役立たずのために、俺は子どもに頭を下げて乳を貰い歩いてきたのかと」

イーサンは張られた頬を手で押さえ、切れ長の瞳をばつちりと丸く見開いて、ロバートを見つめた。やがて、その目の端から透き通つた涙が溢れ出し、赤くなつた頬を伝つていった。

「なんで……なんであんなひどいことを……なんでお前は家族にできる……あんなひどいことを……」

掠れた声で彼は言った。そして弾かれたように床から立ち上がると、溢れる涙もそのままに、小走りに書齋を出て行つた。

扉が固く閉まる音の後に、書齋にはロバートとパンダヒーローのみが残された。ロバートはしばらく閉じられた扉を静かに見つめていた。

(クロスさん……)

パンダヒーローの中で、ジョッシュは凍り付いていた。何よりも固い絆で結ばれていると思つていた二人。そんな二人があつという間に崩壊する様を、この少年は目の前で見つた。そして、凄腕の殺し屋だつたイーサン・カーターが、まるで幼児のように怯えて泣く様も。

ロバートは麗貌を再び皮膚の上に浮かべて振り向いた。右の掌が、イーサンを殴つた時と同じまま、拳を作つて

いた。

「見苦しい所を見せてしまったね」

彼は優雅に靴を進めると、立ち上がつていたパンダヒーローに手をかけ、再び椅子に座らせた。そして、自分も再び床に膝をつき、頬を接近させた。

「続きを話そうか。これで邪魔者はいなくなつた。私の誠意を分かってくれたかい？ 君と何より私のためならば、私はどんなことだつてする。女の子を前金にする。ことだつて、前の相棒を叩き出すことも、私を好きにさせることだつてね。先日の非礼を詫びたつていい。だから私の右腕になつてくれるね？」

最早彼の目に媚びを隠す素振りはない。パンダヒーローは彼の澄んだ青い目が、沼地の藻で覆われた水面のように、どろりと濁りだすのを見た。服の陰から覗く首元や頬にも、体毛というものが微塵も感じられない。不健康に白いものがむき出しになり、その体一つ一つの皮膚もまるで蝸牛のような滑りを帯び、彼の全身が粘液に覆われた蛞蝓のようだ。

唇を必死に噛みしめて耐えていると、両の目の端から涙が溢れ出した。

(そうか。こんな人だつたのか。これがこの人なのか)

ぼろぼろと泣きながら、ジョッシュは虚ろに心の中で呟いた。

俺が雇われていたのは、律儀に命令を聞いていたのは、ほんの少し心を動かされたのは、こういう人なんだ。自分の得のためになら、息子も同然の人を殴つて傷つける人なんだ。

赤くなつた頬を押さえ、涙を溜めてロバートを憐れに見つめていたイーサンが、ぼやけて思い出された。

ああ、あの人は未来の俺だ。ロバート・クロスに使いつづされて捨てられる俺なんだ。俺もいつかそうなるんだ……。

ジョッシュは、ロバートが打ち明けた過去も、イーサンが見せた優しい目も、ボブが諭すように語った話も、全て霧の向こうにある、輪郭のないものを感じられた。彼が今はつきりと感じていられるものは、体の底から湧き上がる狂おしいほどの恐怖だった。

「いい加減に答えないか」

ロバートが急いだ声で言った。はっとして彼を見ると、その美しい顔が自分の口元まで寄せられていた。

「迷っているなら今ここで、望みを叶えてやろうか？」

卑しいほど赤らんだ唇で、彼は熱く言った。

「あんな器量の悪い小娘より、私の方がずっといいだろう？」

その瞬間、ジョッシュの背を悪寒が勢いよく走り抜け、若々しい脚が勢いよく持ち上がった。

書齋にゴツつという固い音が響いた。パンダヒーローの足に肩を蹴り飛ばされ、後ろに倒れたロバートが、後頭部を小卓の角にぶつけた音だった。秀麗な顔が、左半分だけ歪んだ。

ジョッシュは息を切らしながら、床にだらりと体を広げたロバートを見下ろした。その時には、ロバートは痛みなど物ともしないかのように、優美な微笑を取り戻していた。その顔を見て、ジョッシュの中の怯えと嫌悪が、次第に激しい怒りに変わりだした。やがてその怒りが、勢いよく勇氣に変化し、ジョッシュの口をこじ開けた。

「このろくでなし！」

ロバートの口唇が、獲物に食い掛る寸前体を反らす蛭のように見える。ジョッシュの勇氣は一言の罵りだけで

終わってしまった。十五歳の彼の心は、この変わることはない男の前で、嫌悪と怯えと怒りで再びごちゃ混ぜになった。やがて彼は、収まらない心のままに立ち上がり、書齋を駆け出した。豪華な扉を蹴り開け、肅然とした廊下を無茶苦茶に走った。涙が絶えず、滑らかな頬を伝った。数人の護衛が驚いて彼を呼び止めようとしたが、彼は構わず走り続け、やつとの思いでビルの外に出た。

ひんやりとした外気が包む中、ジョッシュは地面に膝を付いて咽び泣いた。全力で疾走した後の疲れと嗚咽で、喉がひどく苦しかった。一頻り泣いて泣いて、やがてジョッシュは、ついさっきまで自分が置いていた鉄の塔を見上げた。まだ涙も混乱も止まらなかったが、そんな心の片隅に、新たな感情が生まれていた。ささやかな憐れみが、彼自身も気づかないうちに、ひっそりと存在していた。

パンダヒーローの忙しない足音が遠のくと、書齋の床にみっともなく座り込んでいたロバートはゆっくりと笑顔を引き込めた。

「ああ、いつてえな、チクシヨウ」

ぶつけた後頭部を摩りながら、彼は椅子に掛け直した。青い目に瞼を被せ、薄く産毛に覆われた頬を両手で擦った。

暖かな気持ちで、彼はほーっと熱い息を吐いた。柔らかな微笑する薔薇色の唇に触れようと指を持っていくと、胸のポケットがカサリと音を立てた。中は見ずとも分かっていた。あのチョココレートの包み紙だ。

一方、ボブ・ヴィンスレットは勤め先のヴァルナ社の

ビルですこぶる暇な時間を過ごしていた。今夜は宿直の日で、このビルに泊まり込みなわけだが、客人が一人来ているという報告の他には特に何も起こらないので、することも特別な。

「中島さん、今日は誰が来てるんですってっけ？」

ボブは妹が作ってくれた弁当を宿直室で頬張りながら、先輩の中島昌義に喋りかけた。

「ああ、パンダヒーローが来てるって言ってたけど。まあ、すぐ帰るだろうから、特に何もやることないと思うよ」

昌義は眠たげに欠伸をすると、動かしていたペンを止め、書類を片付け始めた。

「じゃあ、僕はこれで帰るから。ヴィンスレット、泊まりだったよな？ 寝る前に見回り、よろしくね」

「ええ。お疲れ様です」

コートと帽子を身に着けた昌義が出て行くと、ボブはさっそく宿直室を出た。

彼が来ているのか……。

ボブはぼんやりと三階まで上がり、廊下を歩きながら、あの昼下がりの二人を思い出した。

随分と若い二人だったよなあ。

廊下の端々に鎮座する見事な調度品を退屈しのぎに眺めながらブラブラ歩いていると、四階に続く階段に行き当たった。この上が書齋になっている。ボブは、上の見回りをしようと階段に足を掛けた。

しかし、突然階段の上から、扉を勢いよく開ける音が大きく響いた。その音の後に、忙しない足音がバタバタと続いた。

(なんだ、なんだ!! 一体何があったんだ?)

ボブは不安になって階段を登ろうとしたが、そこでフ

ラッシュライトを部屋に置き忘れてきたことを思い出した。四階から上はもうすでに消灯しているのだ。

(ああ、もう、チクショウ！)

ボブは間抜けな自分を罵りながら、地下の宿直室へ戻るために階段を駆け下りて行った。ライトと一緒に銃も一応持ってきた方がいいだろうか。そんなことを考えながら階段を下りていくと、ふと一階と地下の踊り場のあたりに人影が見えた。

(あれ？ 中島さん、まだ帰ってなかったのかな？)

ボブは駆け足を止めて、そっと彼に近づいていった。

近づくにつれ、彼の全貌が露わになっていく。やがてボブは、昌義にしては彼の背が高いことに気づいた。

なぜこんな所にこの人が？

ボブは彼の背中に、注意深く声をかけた。

「若旦那様？ 一体どうされました？」

イーサンがパッと弾かれたかのように振り向いた。その顔を見て、ボブはギョッとした。静かな瞳にはうつつら涙が溜まり、左頬が真っ赤に腫れている。

「ヴィンスレット……」

イーサンがかすれた声で呟いた。そしてわなわなと体を震わせると、溜まっていた涙を滝のように流した。ボブが驚くのも束の間、彼は床に崩れ落ちると、わあっと大声で泣き出した。

ボブは三つも年上で、しかも凄腕の暗殺者と謳われるイーサンが、まるで迷子の子供のように泣き叫ぶ様を、しばらくポカンと眺めた。しかし、上から足音が響いてくるのを聞くと素早くイーサンの腕をとった。残りの階段を半ば駆けるように降りきると、突き当りにある宿直室のドアを開け、中に滑り込んだ。

中島さんが帰ってくれてよかった……。

ほっとしてボブは振り向くと、イーサンは泣き声を抑え、ひたすらにしゃくり上げていた。ボブは彼を椅子にそっと座らせると、いつも妹にしているように屈んでいった。

「あー……若旦那様。えーと……顔を怪我してますね。てっ、手当てしましょうか！ うん、そうしましょう！」

ボブは大袈裟にガチャガチャと音を立てながら救急箱を取り出し、腫れあがった頬に冷やしたタオルを当てると、湿布を貼った。そしてイーサンが腹に手を当てていることに気づくと、ジャケットとシャツを捲らせて様子を見た。綺麗に割れた腹に触れて、数回圧迫する。

「どうですか？ お腹の中が痛くなったりしますか？」

「いや、それはない」

「よかった。じゃあ、内臓は傷ついていませんね」

イーサンがゆっくりと深呼吸してしゃくりを止めた。

「随分手際がいいんだな……」

「ああ！」

ボブがにっこりと笑って言った。

「小さい妹がよく傷を拵えて帰ってくるもんでね」

「そうか……妹が……」

「今、丁度十一歳なんです。年が離れてるもんでつい甘い甘やかしちゃって。まあ、とんだお転婆で手を焼いていますよ」

「それは……かわいいだろうな……」

言い終えると、イーサンは再び押し黙ってしまった。部屋に、彼の震える声が木霊する。ボブは沈黙が到来したのを確認すると、そっとイーサンの頬に貼られた湿布に触れた。

「一体、誰がこんな酷い事をしたんですか？」

イーサンは答えなかった。ただ下を向いて自身の靴の

爪先に目を落としていた。その長い睫毛が眼球を完全に覆うのを見て、ボブは後悔した。

(なんて無神経な野郎なんだ、俺は！)

ボブは逃げるように、部屋に備え付けられている簡易キッチンに駆け込むと、砂糖とミルクをたっぷり注ぎ込んだコーヒーマシンを淹れ、またドタバタと喧しく戻ってきた。イーサンは温かな湯気のたつカップを受け取ると、三口ほどおとなしく口にした。涙の乾いた目尻が、コーヒーマシンの甘さにほんの少し緩んだ。

「殴られたんだ」

彼はやがて、カップの奥底に落とし込むように呟いた。

「ロバートに」

ボブは驚きのあまり、カップを手から取り落としそうになった。

(旦那様が!! 若旦那様を!! なぜ!!)

しかし、俯くイーサンに気取られまいと、彼は軽く二、三度頷いただけでコーヒーマシンを啜った。ところが、彼の素早い驚愕を、イーサンの慧眼は見逃さなかった。

「びっくりだよな」

静かな声で彼は呟いた。

「こんなに簡単に、終わって来るものなんだな。俺はいつも終わりの呆気なさに驚かされるよ。今まで一生懸命に積み立ててきたものが、拳一発で全部粉々になるんだもの」

ボブは、ようやく上を向いたイーサンの顎のあたりを見つめながら言った。

「要するに、道を分かつということですか？」

「道を……わ、分かつ？」

「旦那様と別れるんですね？」

「……うん」

イーサンは小さく頷いてコーヒーをちびちびと飲んだ。しかし、甘い唇を舐めると、また泣きそう顔で言った。

「でも、どこへ行けば……」

ボブは目じりを下げ、唇を歪めて涙に耐える彼が、近所の男の子にフラれて散々泣いた後の妹に似ている気がした。

「どなたか頼れる方は？」愛人のミス・ドウヴィーヌとか……」

「ヴァレリアか……」

イーサンは一人考え込んだ。

事情を話せば彼女は分かってくれるだろうか。いや、ダメだ。俺がロバートと別れたことが、彼女の他の客にバレるかもしれない。なら、メイド長のミリーは？ 彼女は今でも結構仲がいいし。いや、これもダメだ。恋仲でもない男を家に住ませたりなんかしたら、彼女の名誉が傷つくかもしれない。

パトリック・オーウエルは？ 今生きている友達は何も彼しか……。

そこで彼はそつと首を振った。

ダメだ。彼の所に住むなんてできない。彼らにどんな顔をすればいいのか……。

ボブは、また涙を零しそうになるイーサンにそつとため息をついた。何故だか、彼を放っておけなかった。いくら恩があるとはいえ、一緒にランチに出たりするほどの仲でもなかったこの人に、何故これだけ心を揺さぶれるのか、ボブには分からなかった。分からなかったが、理由などいらぬことにも気づいていた。ボブは明るく立ち上がると、イーサンのほっそりとした肩に大きな手を置いた。

「じゃあ、ウチにいらっしやい、カーターさん」

イーサンの目が大きく見開かれた。案外ぱっちりした目なんだな。

ボブは穏やかに思った。

「で、でも……」

おずおずと呟くイーサンを見て、ボブは彼の心情を僅かな動作から読み取った。そこでまた一段と大仰に手を広げて笑った。

「なあに、構いませんよ、カーターさん！ ウチは大金持ちってわけじゃないけれど、一人分の生活をケチるほどのしみつたれじゃあ、ありません！ それにまあ、俺の家族はどんちやか喧しいのばかりですが、陽気で気のいい連中でもありますよ！ 親父もお袋も妹もばあちゃんも、みんな歓迎してくれますから！ それにあなたみたいな美青年が一つ屋根の下となつちやあ、女連中なんか舞い上がって財産全部教会に喜捨しちゃいますよ！」

イーサンは陽気に大笑いして肩をバシバシと叩くボブを、大きな目で見つめていた。

俺と一緒に暮らそうと言っているのか……。こんな俺と……。

収まっていた涙が、もう一度溢れそうになる。しかし、今度は悲しみの涙ではなかった。

彼についていけば……彼と生きていけば……やり直せるだろうか……。

あの日の夜、パンダヒーローに語った自分の言葉が思い起こされた。

『俺はただ、ロバートと一緒に成り上がりの坂を駆け上がったっていただけだった。今更どうにかしようと思ってももう遅い』

そんなことはないだろうか……。

熱い滴りが、頬を一筋流れて行った。

まだ遅くはないのかもしれない。もう一度、やり直せるかもしれない。彼と共に行けば、俺はまた、一から始められるのかもしれない。

「君と行くよ、ボブ」

ようやく、イーサンは笑った。

「君と行く。もう一度人生を生きたいんだ。君と一緒に」

「やつと笑ってくれましたね」

ボブもまた、穏やかに笑った。

「取り合えず、今日はもう寝ましょう。あっちのカーテンの奥にもう一つベッドがあります。俺はこっちのを使うから、あなたは……」

「いや」

イーサンが、ボブの手を強く取った。

「一緒に寝て。一緒にベッドで」

ボブは内心ギョツとしたが、イーサンの目の色があまりにも清らかだったので、すぐさま笑顔で頷いた。

二人は背を合わせて眠った。ボブに広い背から、温かな体温がイーサンの背へと伝わった。イーサンにとつて、こんなに暖かい眠りは、あまりに久しいものだった。

翌朝はどんよりと曇っていた。

寝台の上で、ミミは重たい頭痛に苦しんだ。右を向けば左のこめかみが痛み、また寝返りを打つと次は反対側。ミミは次第にうんざりしてきた。このまま痛みと共にシートに寝転がっているのも癪だから、仕方なく起き上がった。

ミミはちつとも美しくない顔で顔を洗い、髪を整え、服を着替えた。部屋を出て廊下を歩くと、ミミはふとジョッシュの部屋の前で足を止めた。この扉の内側には、

まだ彼が眠っているはずだ。それなのに、今日はいつものように寝息が聞こえてこない。

(もしかして、まだ帰ってないのかしら)

頭痛が一層ひどくなった気がする。昨夜は彼が出て行って早々に眠りについたので、その後の成り行きは夢の外のことだ。ミミは頭の中で痛みと共に湧き上がる予感に、冷や汗を流した。

(まだ帰ってないのかしら。もう夜が明けたというのに。でも、帰ってないとしたら、彼は一体あそこで何をしているのかしら……)

女の子の予感があと一歩で危険な域に差し掛かる前に、彼女の不安は解消された。眼前の扉が不意に開き、ジョッシュ・ワイルダーのつややかな素面が現れたのだ。彼の目の下は青黒い陰りで薄く覆われている。それを見て、ミミは寝息が聞こえなかった訳を知った。

「よかった。帰ってたのね」

ジョッシュは力なく笑って見せた。そのまま、彼はミミの手を取って居間へと廊下を歩いて行った。

「ジョッシュ？」

ミミは居間の長椅子にくぐったりと座るジョッシュの、白い項に向かって言った。

彼は答えなかった。代わりに両手で顔を押しさえ、がっくりと項垂れた。

ミミの背が、再び湿り気を帯びた。脛が震えるまま、彼女は一歩ずつ彼に近づき、隣に腰を下ろした。細い肩に手を掛けると、年若い顔が持ち上がった。

「何があったの？」

と、一言言ったが、息もつかぬうちに素早く言い換えた。

「何をされたの？」

ジョッシュはようやく目を据えた。初めて彼女を見た。そして胸の奥底から激しい嗚咽を吐き出すと、ミミの肩口にしな垂れかかった。服の肩口の飾り紐が、ジワリと湿った。

ミミは彼の背に手を回し、ただ彼のなすがままに任せただ。やがてジョッシュは、瞼の裏に涙を収め、一言ずつ話し始めた。

「俺は何もされてない……まだ何も……」

ミミの手が背から項へと進み、彼の頭を持ち上げた。ジョッシュの声に熱が籠り始めた。

「でも、いつかは俺もあなるんだ。きっとこれから俺は、使われて使われて、バットの先がすり減って柔らかくなったら捨てられる。俺は土道具になる運命のために、また何人も殺さなきゃならないんだ」

ジョッシュの涙が、次第にミミの頬へと伝っていった。煮えたぎる心そのまま液体になったかのように、熱い涙だった。

「あの人は……俺が思っていたのよりもずっと……ひどい人だったよ」

ジョッシュの頭の中に、張られた頬を押しさえ、涙に濡れた目でロバートを見上げていたイーサンが浮かんだ。

あの瞳の大きさ。頬の赤さ。

「俺、もう分からないよ、ミミ。今までずっと名うての暗殺者として名を馳せてきた。汚いところだつて山ほど見たし、自分だつてそれを弁えてた。それなのに、なぜ？」

あの人がした、あんなにも酷い事には、どうしてこんなに気持ち上がるんだろう？ 嫌悪や怒りが湧いてくるんだらう？ なあ、ミミ。俺はこのままずっとこうなのか？

な。ずっとあの人の言う事を聞き続ける、従順な金属バットのままたのかな。そしていつかはゴミみたいに捨て

られて、最期に持つてるのは『ロバート・クロスの道具』って肩書だけなのかな。ミミ。俺もう嫌だよ。今はつきりと分かるのは、あの、平気で人の心を傷つけるロバート・クロスがどうしようもなく嫌いだつてことだけなんだ。なのに今俺の手綱を握ってるのは、そのロバート・クロスだ。俺はあの人の道具である限り、あの人と何も変わらない。だけど、かと言って何をすればいいのかも分からない。ロバート・クロスの元を離れて、俺は一体次は誰に従えばいいんだろう。いや、俺は一体何になれればいいんだろう。どっちつかずだ。あの人に使われることが嫌なのに、そのために何をすればいいのかさっぱり分からない」

ジョッシュの声が薄れていった。彼の項はがっくりと、額が膝に着くくらい垂れ下がる。眠たげな吐息が増えていく。

「ミミ。君を見ていると、一層強く思うんだ。人に、いや君に胸を張れることをしたいって。そして何より、正しい事をしたって」

声が完全に消え、やがて口から出るのは寝息ばかりになった。ミミは彼の細い体に腕を回し、そつと長椅子に横たえてやった。

尽き果てたように眠りに落ちたジョッシュの元を、ミミはそつと離れた。極めて静かに居間を出て、これまた音を立てず廊下を歩き、そつと自室へ入った。机の引き出しを開け、青花模様のクッキー缶を取り出した。

そして、机に思いつき叩きつけた。

「クソツタレ!!!」

ミミは今まで口にしたこともない、下品な言葉を勢いよく吐き出した。机の上に、辛うじて蓋を留めている缶を再び掴み、さらに強く投げおろした。ナイチンゲール

と葦の模様の蓋が弾け飛び、中身が転がり出した。

「チクシヨウ！ あいつめ！ よくもやりやがったな！  
いつもいつも、あんたはぶつ壊すばかりだ！ よくも  
やってくれたわね！ よくも、よくも、あたしの……あ  
たしの！」

ミミは荒い息をしながら、暫くどこともつかない場所  
を睨みつけていた。胸の内から怒りを超えて、気管を塞  
ぐような細かく鋭い感情がせり上がり、ミミの頭を突き  
上げた。

缶の中から零れ出た、ラピスラズリ色のインク壺が、  
電球の光を受けて暖かく輝いている。それを見て、ミミ  
は弾かれたようにそれを取り上げた。ヒビは入っていな  
い。

ミミは次々と無我夢中で卓上に散らばった宝物を掻き  
集め、缶に収め直した。ブルブル震える手で、しつかり  
蓋を閉め、その時、キャンディーの棒を一つ、しまい忘  
れていることに気が付いた。

何をしているのかしら、私は。

ミミは缶を投げ出してその棒を手を取った。手の中で  
強く抱きしめると、こんなに細い棒がまだ暖かかった。

なぜなの？ なぜこんなにも酷いことをするの？ な  
ぜあんなに若いジョッシユを傷つけるの？

涙が溢れ出た。一度は収まった怒りが、またむらむら  
と湧き上がってくる。ジョッシユの目の下の陰り、落ち  
くぼんだ頬が、ミミを堪らない思いにさせた。

許さない。絶対に。私の大事な人を傷つけたなんて。

ミミは部屋を駆け出していった。居間で眠っている彼  
を思いながらも、それでも夢中で隠れ家のドアを開け、  
朝の空気のひんやりとした通りに出た。

やりきれない思いに駆られながら通りを歩いていると、

ヴァレンタインの甘い香りがそこかしこに漂い始めた。  
クッキーやチョコレートや、真つ赤な薔薇の香りに、ミ  
ミはぼろぼろと涙を流した。手に持った棒を強く握りし  
めた。

私は彼が好きなんだわ。

ぷつりぷつりと、彼女は胸の中で呟いていく。

好きなんだわ。彼が傷つくのは私だつて見たくない。  
だからこそ、彼を泣かせたあの人達を絶対に許さない。  
許したくない。なのに……。

大通りを歩いていくと、途中、綿織物の工場の前を通  
りかかった。ミミが足を止めた時、ちょうど休憩を知ら  
せるベルが鳴っていた。忙しないベルが鳴りやまないう  
ちに、鉄壁の工場から、たくさんの年若い女工達が洪水  
のように溢れ出てきた。彼女達は荒れた白い手を擦り合  
わせ、口々に何か話しながら、通りの向かい側の露店に  
うず高く積み上げられたチョコレートの山を熱っぽく見  
つめていた。しかし、お菓子に対する情熱も、刻々と経  
つ時間の前に萎み切ったのか、やがて彼女達は地面に座  
り込み、ポケットから出した包みを開くと中身の乾いた  
パンをゆつくり齧りだした。

ミミは、それが彼女達の朝食だとすぐに理解した。チ  
ョコレートもケーキも知らないであろう彼女達の健康的  
な歯を、ミミは寂しく見つめた。この、名も知らない、  
こちらに挨拶一つ寄せさない娘達に、ミミは次第に自分  
と同じ目を向けた。

私もジョッシユも彼女達と同じなんだわ。

工場の前を立ち去りながら、ミミは呟き続けた。

目にあれほど情熱を湛えても、結局は目の中でお終い  
なんだわ。私も彼も、ひたすらチョコレートに手を伸ば  
そうとするけれど、どこかで乾いた。パンで満足してしま

っているんじゃないかしら。  
露店から香る香りが、次第に濃くなっていく。バター  
の香りが増えてくるのは、シヴァ街に近づいたからだ。  
でも、それでいいのかしら。

シヴァ街の入り口で、ミミは立ち止まった。

それがいいのかしら。

背筋がぞわりと粟立つのを、ミミは感じた。最早悲し  
みは心になく、代わりに凄まじい激しさが、彼女の身の  
内を突き上げ始めた。ミミは棒を握る手を、片方の手で  
強く押さえた。

変わらなきゃいけない。

額の血管が、熱く脈打つ。汗が滝のように流れる。血  
液の急な上昇で、目の前が一瞬眩んだ。視界が遮断され、  
足が纏れたが、ミミは辛うじて立ち続けた。

そうよ。変わらなきゃいけない。いつまでもパンで満  
足したりせず、手を伸ばさなきゃいけないわ。そうしな  
ければ、ジョッシユはずつと、あの人の道具のまま。私  
もずつと、前金のまま。

ミミは再び街路を歩き出した。ただもうふらふらとは  
歩かなかつた。得体の知れない、何からできたのかも分  
からない、そんな形のないものが彼女の手を強く引いて  
いた。

忙しい人の波が崩れていくと、巨大な影が彼女を覆  
った。上を見上げると、太陽の光を浴びてヴァルナの鉄  
塔が少女を悠然と見下ろしていた。

もう無駄よ。

強く、彼女は話しかけた。

もう、私もジョッシユも、あなたがくれる乾いたパン  
に騙されたりしないわ。これからは道を選ぶの。高く高  
く、チョコレートに手を伸ばして。

やがて、ミミはそつとビルから顔をそらし、踵を返した。

でも、今は帰ろう。今はとにかく、彼のそばにいてあげよう。

彼女は、出て行った時よりも強い足取りで、家へと足を運び出した。

ところが、三メートル歩いた先で、はつと立ち止まった。

もう十歩ほどの距離しかない歩道の先で、一台のタクシーが止まっていた。その深緑のフォード車の扉が勢いよく開けられる。ストッキングに覆われた足が忙しく現れたかと思うと、一人の年若い女性が運転手に料金を手渡しながら車から降りた。彼女はタクシーが走り去るのも待たず、何やら急いだ様子で辺りを見渡し、近くにあった帽子屋の店先に立つ男に、口早に何かを喋り始めた。

ミミは目を細めて女性を見た。彼女の帽子に飾られたポインセチアの造花。模造毛皮に縁どられたコート、そのコートから覗く真っ赤なスカートの裾。それら全てに見覚えがある。

ミミは注意深く彼女に近づいていった。やがて、彼女と男の話す内容が耳にはつきりと届き始める。

「十二歳ほどの女の子と申しますと、ご婦人」  
身なりのいい男が、宙を見上げながら言った。

「何か月か前に、パンダの着ぐるみを着たおかしな男と、ヴィシユヌの方へ歩いていくのを見ましたよ」

「まあ、本当ですよ！ 嬉しいことを聞きましたわ！  
ところで、その、パンダの着ぐるみとやらはその、もしかして、あのパンダヒーローのことかしら？」

ミミは一人大きく頷いた。そしてこっそり彼女に接近

し、声をかけた。

「リーズ先生？」

横に向けられていた顔が、こちらに向いた。顎で切りそろえられた紅茶色の髪、それに薄緑のアイシャドウ。かつてのミミの家庭教師、リーズ・ドーキンスの品のいい化粧顔が、驚きを湛えてミミを見ていた。

「まあ、ミミ!!!」

今まで聞いたこともない素つ頓狂な声が、彼女の赤い唇から飛び出たかと思つたのも束の間、ミミは力強くリーズの腕に抱きしめられていた。優しい香水の匂いと頬に押し付けられる髪の感触が、懐かしくミミを包む。

「ああ、ミミ！ よかった、やっと会えたわ！ あなたが前金にされたと聞いてから、居ても立ってもいられなかつて、あちこち探し回つたのよ！ 新しく雇つた殺し屋つて言つてたから、てつきり街の外だと思つてたけど、なあんだ、まだこの街にいたのね！ でも、とにかくまた顔を見られてどんなに嬉しいか！ ああ、本当によかった！」

近くで棒立ちしていた男が、「まあ、よかったですな」と決まり悪そうに言つて立ち去つて行つた。ミミはリーズの懐かしい、シヤネルの香水の匂いにすっかり気が緩み、先ほどの強い思いも揺らいでしまうかに感じられた。

「リーズ先生。心配してくれてたのね」  
「当たり前じゃない！」

リーズの腕が一層強くミミの体を締め付け、一瞬息が詰まった。

「いくら何でもひどすぎるわ、こんな小さな女の子を前金にするなんて！ もしあなたがひどい目に合つたらと思うともう本当に、私まで恐ろしくつて！」

ミミは、リーズが半ば涙声で言うのをおかしく感じた。

(仕方ないわ。私からちゃんと言わなくつちや)

ミミはリーズから体を離すと、いくらか穏やかな声で言った。

「大丈夫よ、リーズ先生。そんなに心配しないで。私の生活が気に入つてゐるの」

リーズは呆気にとられた顔をした。しかし、それも一瞬のことで、彼女はやがて何かを確認するかのようにはつきりとミミに聞いた。

「えつと……あなたは今、あのパンダヒーローさんと生活してゐるのよね」  
「そうよ」

「じゃあ、そのパンダヒーローさんは、あなたを大切にしているのね？」  
「ええ」

ミミは強く頷いた。

「確かに彼は殺し屋だけど、中身は普通の男の子だもの。かつこよくて、ユーモアはあつて、おまけにすつこく優しいの。私、今は彼と一緒にすつこく幸せだわ」

「そう……そうなのね」

リーズは口唇に指をやつて、何度も頷いた。きつちりと整えられた眉が厳しく引き締まつていた。

やがて、リーズは眉の緊張を解いて笑つた。

「それじゃ、あなたは今幸せに暮らしてゐるのね。ひどい目にもあつてないのね。ああ、よかった。それが聞けて本当に嬉しいわ」

ミミは、彼女の暖かな笑みが胸にしみとおるのを感じ、昔のことも心安らかに思い出した。あの美しく冷え切つた同居人と、リーズは違つた。気づまりな生活の中で、この優しい家庭教師は、周りにある花も家具も服も、一緒に温めてくれたのだ。



「ねえ、リーズ先生」

「ミミはリーズの手を握って言った。」

「今から私達の家に来ない？」

「ええ？」

リーズは小首を傾げて答えた。

「でも……いいの？」

「もちろんよ！」

リーズの手を取って歩き出しながら、ミミは言った。

「先生には彼のことを知って欲しいもの。私が彼の生活にどれだけ満足してるか、ちゃんと知って安心してほしいの」

「まあ！ 願ってもないことだわ！」

リーズの感嘆が、確信を得たものになった。ミミは、彼女の手が自分の掌に触れているのを感じ。先ほどまで身の内側を突き上げていた思いにそつと蓋をした。最早、背後の塔を見ることがもなかった。

二人はシヴァ街を抜け、ヴィシユヌ街を下っていき、いくつかの工場を通り過ぎると、ひっそりと狭い路地裏へと入った。リーズはレンガ壁に取り付けられた小さなドアを見つけ、明るい無邪気な声をあげた。

「あら、かわいい！ まるで妖精の隠れ家みたいね！」

ミミは隠れ家を褒められたのが素直に嬉しかった。

ドアを押して玄関に片足を入れた。その時、ふとミミは自分が鍵を掛けずに家を出たことを思い出した。(そっぴえばジョッシユはもう大丈夫かしら)

「ジョッシユ？」

と、ミミは薄暗い廊下に向かって言った。しばらくした後、ガタガタと柵を開け閉めする音がし、居間ではなくジョッシユの自室のドアが開いた。

同居人は、泣き疲れて眠っていた少年ではなかった。

彼はきちんとパンダの着ぐるみを身に着けていた。扉の陰で隠れているが、利き手でない方の手にはバットが握られている。

(きつと外の足音を聞きつけて、大急ぎで用意したんだわ)

ミミは、彼の都合も考えず突然人を連れてきてしまったことを、ほんの少し申し訳なく思った。

「ミミ、その人は？」

と、彼は背後のリーズを見て緊張した声で言った。

「安心して、私の知り合いなの。あなたに是非紹介したくて」

「あ……君の知ってる人なの」

ガランという音がした。パンダヒーローが気まずそうにもじもじしながら前に進み出た。

「失礼を、ご婦人。あの、なんだか、警戒してしまう癖が抜けなくて。ミミのご知り合いと聞いて安心しました。どうぞ入ってください。お茶淹れますよ」

「いいえ、いいんですのよ。こちらこそ、突然お邪魔して」

と、リーズはにこやかに答えた。ミミはほつとして彼女を見上げた。

その時、ミミはリーズの顔に強烈な違和感を覚えた。

美しく品のいい顔。その顔が、居間へと向かうパンダヒーローの後ろ姿を、穴も開かんばかりにじつと見つめているのだった。

三人は居間のテーブルを挟んで座った。ミミはまず、リーズにジョッシユを紹介した。

「リーズ先生。この人がパンダヒーロー。今はおかしな

成りをしているけど、ちゃんと普通の男の子だから安心して。それからジョッシユ。前話したと思うけど、この人がミス・リーズ・ドーキンス。私の元家庭教師よ」

「あなたがあの優しいリーズ先生ですか。初めまして」

パンダヒーローがおずおずと片手を差し出した。いつもよりぎこちないのは、きつと美女を相手にしているからだろう、とミミは面白くなく思った。

リーズは彼の手を取って快く二度振った。もう一度ミミは彼女を見上げた。唇は優しく反っているのに、目だけはやはり彼を貫いている。

「ねえ、リーズ先生」

ミミは何気ない風を装って聞いた。

「私があそこを出て行つてから、今までどうしてたの？」

「ああ、それね」

リーズは紅茶のカップを口元に寄せて答えた。「あなたが居なくなつてから、私はすぐに解雇になつてね。でも幸いにシカゴでタイプピストの職を見つけたから、そこで働いてたの。だけど、忙しくていてもあなたのことが心配で心配で。仕事の合間に探し回ってたんだけど、ようやく今日見つけられたのね」

リーズは手巾でそつと目頭を押さえた。布地の間から涙が頬に滑っていくを見て、ミミはその透명한涙に安心した。やがて、リーズはパンダヒーローの方を向いた。

「パンダヒーローさん。あなたの事はミミからよく聞きました。最初は殺し屋と女の子が同居なんてとんでもないと思っていたけれど、ミミはあなたをととても慕っているようですわ。私も安心です。ところで、パンダヒーローさん。あなたを新聞で見ましたわ。ロバート・クロスの命令であの、極悪非道のジョン・ヘイスティングスを殺害したと。そうですわね？」

「そうですわね？」

「えっと……はい……」

「では、あなたはロバート・クロスに雇われた身なのですね」

リーズの声が鋭くなった。視線が剣先のように尖る。ジョッシュの肩が、着ぐるみの中で強張った。

「パンダヒーローさん。もう一度聞きます。あなたはこの子と共に暮らしながら、この子を前金として突き放した男の手足となり、お金を貰っているのですか？ あの男と同じように、この子を前金として見ているから、こうして一緒にいるの？」

「待って、待って、リーズ先生！」

「ミミは思わず席から立ち上がった。」

「彼をそんな風に言わないで！ 彼は私のこと大事にしてきてるし……クロスさんとのことだって、ちゃんと考えて……」

「ええ、あなたが彼のことを思っているのはちゃんと分かっているわ。でも私は彼自身の口から聞いてみたいの」

リーズは再び、パンダヒーローを刺し貫くように見た。

「もう一度聞きます。あなたは宣伝法としてのパンダヒーロー？ それともこの子を愛し、慈しんでくれるパンダヒーロー？」

ジョッシュは細やかな動きを止めた。そして、少年らしい高低の定まらない小さな声で、絞り出すように答えた。

「俺は……俺は確かにずっと……ただの宣伝法でした。でも……段々ただの物として扱われることが堪らなく……」

「辛くなったんです。俺はきつと……ただのロバート・クロスの右腕じゃなくて、ただ一人の人間としていきたいんです。ミミが、そう思わせてくれたんです」

ジョッシュは着ぐるみの顔を強く上げた。

「それに……俺はあの人が嫌いです。中にはあの人に救われた人もいるけれど、俺はもう耐えられません。俺は物言わぬ武器でいたくない。だから、あの人の横暴さについていけないんです。ええ、そうです、俺はあの人が大嫌いです！ 人を人として見ない人間は家畜以下だ！ 俺はあの人とは違う何かになりたい！ 優しさを持つ何かになりたいんです！」

ジョッシュは息を切らしてリーズをしつかりと見た。口から吐いた熱い息が、着ぐるみの内側にあたって再び唇に戻って来た。唇が、表面に戻って露となった息で潤った。

「ミス・ドーキンス。そうです、はっきり言います。俺はもうロバート・クロスの宣伝法ではありません。俺はパンダヒーローです。ミミを愛し、慈しみ、そして自らの心に従う、そういう人間です」

ミミは彼を驚いて見つめた。かわいい着ぐるみに顔は覆われているが、その素面がいかに凛々しく引き締まっているか、声色が伝えていた。先ほどの、傷つき、打ちひしがれた腰の線の細やかな少年ではない。ミミは、今の彼の素面がどれほど美しく魅力的か想像して、頬を火照らせた。

「ああ、その答えが聞きたかった」

リーズの鈴のような声があった。彼女の顔から先ほどの険が消え、代わりに大輪の雛髷粟のような穏やかな笑顔を見せていた。リーズの白い手が、そつとパンダヒーローの黒い手に添えられた。

「あなたが強く優しい心の持ち主だとしつかり確認できました。ロバート・クロスとはまるで違う、人を思いやることのできる人なのね。ずっとこういう人を探していたわ。やっぱり私の見込んだ通り」

リーズはそつと顔を笑顔の下に、名残惜し気に収め、少し真面目な表情を繕った。

「私はあそこをクビになつてから、あちこち歩き回りました。それはもちろんミミを探すためでもあったけど、もう一つ目的があったの。それは、パンダヒーロー。あなたに会うため」

「俺を？」

リーズはハンド・バッグを開け、中から新聞の切り抜きを取り出した。大きな見出しの下に、バットを高く天につき上げるパンダヒーローの写真が載っている。

「見て。これはあなたのヴァルナ社での初仕事の時の記事よ。これを見て、クロスがミミを引き渡したのはこのパンダヒーローだと気づいたの。そこであなた達の居場所を突き止めようとしたんだけど、私ったらバカね、てつきりこの街の外で暮らしてるもんだと勘違いしちゃって。突き止めるのに時間がかかっちゃったのよ。まあ、それはさて置きとして、私があるに注目した理由はもう一つあるわ」

リーズは見出しの下の細かな印字を指で指した。

「よく読んでみて」

「ミミとパンダヒーローは身を乗り出して記事を読んだ。『一九二七年、九月三十日、シカゴ北部のネオンライタタウンで新興飲料製造業者のジョン・ヘイスティングスが殺害された。その犯人とされる人物は、奇妙なことにパンダの着ぐるみを纏い、金属バットを左手に持つ、パンダヒーローと呼ばれる者であった。彼の持つバットには、ロバート・クロス率いるヴァルナ社のロゴがあった。ヘイスティングスとクロスが対立関係にあったことから、この事件はクロスの目下であることは間違いない。しかし、この事件を単にクロスのプロパガンダとは、ネオ

ンライトタウンの住民は思っていないらしい。このパンダヒーローは、様々な場所に体を移しながら暮らしていたらしいが、どこに行っても中間層からの人気は高かったらしい。また、殺害されたヘイスティングスがかなりの極悪人であったことから、パンダヒーローに感謝する人々もまた多いと聞く。

また、「パンダヒーローはあのクロスに大人しく従える性格ではない。いつかは手を切るはずだ」という意見もある。いつかはクロスの元を去り、彼の権力を憎む住人の味方になってくれると期待する人もいるのだ。

さて、このパンダヒーローはロバート・クロスの手足で居続けるのだろうか。それとも、新たな革命の先駆者と化するのだろうか』

ジョッシュはしばらく、その印字の後半をぼんやりと見つめた。革命の先駆者。その言葉が、羽虫の大量のよな印字の中で異様に鮮やかだった。自身の心に落とし込まれ、静かに波紋を落とす。そして背筋をぞくぞく粟立て、身の内に爆発寸前の鶏卵のように、熱く燻った。

革命の先駆者。  
なんと、勇気の漲る言葉なんだろう。

しばらく二人が何の言葉を発しないのを見て、リーズは焦れたように話し始めた。

「分かるかしら？　これがあなたに対する世間の声よ」  
「……驚いた」

ジョッシュが声を震わせながら答えた。  
「こんな風に思われてたなんて……」

「まあ、あなたはあれね。もう少し世の中を見た方がいいわね」

リーズはガヴァネスらしい、いたずらっ子を相手にするような口調で言い、記事を取り上げた。

「ほらね、あなたをロバート・クロスの道具じゃない、新しい力の象徴として見ている人だつて大勢いるのよ。私はこれに注目してあなたを探していたの。あなたがさつき答えてくれたように、人の為に何かが出来た人であるなら、あなたはもっと人々に受け入れられ、必要とされるわ。私はずっと、そういう人を探していたわ……私のずっと若い時から望んでいたことを、あなたならやり遂げられるかもしれない……」

ミミは新聞記事からリーズの顔へ視線を上げた。彼女の美しい顔立ちには、あの玄関で見せた、一度手を付け、逃がしてしまった獲物をようやくみつけたような熊のような表情を湛えている。あの陽だまりのようなリーズ先生ではなく。

「なんです？　その望んでいたことというのは……」

ジョッシュが聞いた。リーズの顔から雄々しさが次第に引いていった。代わりに、長年深い海の底に沈みこませていた老成した苦心の影が、海底から引き揚げられたかのように、その顔に浮かんだ。

「ずっと、長い間……私が娘の時からずっと願っていた……いつか、いつか成し遂げてやると、ずっと思っていた……」

ミミは、あの雄々しさよりも、今の彼女の顔立ちに驚いていた。何と老けて見えることだろう。

リーズは、ミミもパンダヒーローも、また部屋のどこともつかない場所も見ずに、静かに、しかしはつきりと言った。

「ロバート・クロスを殺してほしいの」